ロンギヌスの槍

作　吉水　恭子

【序章】

ラテン語の祈りの声が舞台を満たしている。

舞台上には一つの木の重そうな大きなテーブル。古ぼけた四脚の木の椅子。
舞台奥には石造りの階段。突き当りに滲むような光の十字架が見える。
両脇には柵のような壁。その影が映る舞台面は檻の中のように見える。
舞台壁沿いには木の丸椅子、影の中で数人がその前に立ち並んでいる。
ここは、法廷でもあり、牢屋でもあり、処刑場でもある。そして、日常のどこかの場所でもあるのかもしれない。

夏用のセーラー服を着た少女（真（まこと））が一人、ゆっくりと階段を上っていく。

鐘の音が鳴り響く。

声　「さてユダヤ人たちは、その日が準備の日であったので、安息日に死体を十字架の上に残しておくまいと、ピラトに願って、足を折った上で、死体を取りおろすことにした」

少女はただ上り続ける。

声　「そこで兵卒らがきて、イエスと一緒に十字架につけられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。」

十字架の根元に澱んだ闇の中から、一人の少年（聖（きよし））が立ち上がる。
聖が少女に手を差し伸べる。
少女、少し微笑んだように見える。

男の声「しかし、彼らがイエスのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを見て

その足を折ることはしなかった。」

少女、隠し持っていた刃を握り聖に近づく。

聖は少女を抱きとめるようにゆっくりと手を広げる。

声　「しかし、ひとりの兵卒が槍でその脇を突き刺すと、すぐ血と水とが流れ出た。」

少女の刃が聖を刺し貫くその瞬間、十字架の光が強烈に辺りを照らす。

男の声「それを見た者があかしをした。そして、そのあかしは真実である。その人は、自分が真実を語っていることを知っている。それは、あなたがたも信ずるようになるためである。」

暗転。

真闇の中、人々の声が響く。

声　「彼らは自分が刺し通した者を見るであろう。」

【一の序】

暗闇の中、誰かが身じろぎした気配。

聖の声「真、真。」

衣擦れの音。

聖の声「真、どうしたの？眠れないの？」

マッチを擦る音。

ランプが灯ると、階段の一部分だけが、ふんわりと明るくなる。

真　「ごめん。起こしちゃったのね。」
聖　「大丈夫。僕も眠れなかったから。」
真　「具合悪いの？」
聖　「大丈夫だよ。真の方こそ少し魘されてた。」
真　「ああ。ちょっと夢を見てしまって。」
聖　「夢？」
真　「お母さんたちには言わないでよね、笑われるから。」
聖　「笑いやしないよ。
　　珍しいね。いつもはどんなに起こしても起きないくらいなのに。」
真　「・・・。」
聖　「なに、怖い夢？」
真　「話したらきっと笑う。」
聖　「笑いやしないって。」
真　「本当？」
聖　「ほんとう。」
真　「約束よ。」
聖　「うん、約束。」
真　「でも、やっぱり・・・。」
聖　「信用できないっていうの？」
真　「そうじゃない。ただ、話したらなんだか本当になってしまいそうで・・・。」
聖　「・・・。台所、行かない？」
真　「え？」
聖　「牛乳、温めてあげるよ。」
真　「お母さんたち起きないかしら？」
聖　「大丈夫さ。今頃ぐっすりだよ。真好きだろ？ちょっぴり砂糖も入れてさ。あったかい牛乳飲めばきっとゆっくり眠れるよ。」
真　「・・・甘ーくしてくれるなら。」

聖、真の頭をくしゃくしゃっと撫でる。

聖　「よし、行こう。」

聖、立ち上がり真に手を伸ばす。

真　「ありがとう、兄さん。」

二人、連れ添って立ち上がる。
二人の姿が闇の向こうに消える。

【一】

中央ひな壇のテーブルの周りが明るくなる。
男（立花刑事）が一人椅子に腰かけ、分厚い資料に目を通している。
椅子には上着が無造作にかけられている。
テーブル上には銀色の灰皿。煙草の煙が漂っている。

両脇の丸椅子に座っていた男（加藤刑事）が立ち上がりひな壇の方に歩き出す。

男の声「失礼します。」
立花　「入れ。」

男（加藤）がひな壇に上がる。手には白い包帯が巻かれている。

立花　「どうだ。」
加藤　「痛みは大分。」
立花　「そうか。」
加藤　「ただ…。少し麻痺が残るそうです。」
立花　「災難だったな。」
加藤　「いえ。自分は職務を全うしただけですから。」

立花　「そうだな。」

立花、手にした煙草をもみ消し、また新たな一本に火をつける。

加藤　「また増えたんじゃないですか、煙草。奥さん、嘆いてましたよ。」
立花　「勘弁してくれ。家じゃ吸えないんだ。」
加藤　「いつでしたっけ？予定日。」
立花　「忘れた。」
加藤　「ついでにやめてみたらどうです？体に悪いんですってよ、煙草。吸いすぎなんですからいっつも。」
立花　「お前はどうなんだよ。」
加藤　「まあ、自分は、チョンガーですから。」
立花　「関係ねぇだろ。」

加藤、ちゃっかり煙草をねだる仕草。
立花、苦笑いしながら差し出す。
二人、煙草を吸う間。

加藤　「様子、どうですか？」
立花　「さあな。あの落ち着きようだ。今更取り乱してるとは思えん。」
加藤　「そうですか。
ねえ、立花さんはどう思います、今回の事件。」
立花　「ん？」
加藤　「誰か裏で糸引いてるんじゃないですかね。」
立花　「誰かって誰だよ。」
加藤　「ほら、あの愛心党党首の・・・。」
立花　「ああ。」
加藤　「怪しいでしょ。一緒にしょっ引かれてるじゃないですか。現場にいたんですよねぇ。
大体、あの子落ち着きすぎじゃないですか、人ひとり殺してんですよ。手順だって
手際だって、良すぎるでしょ。」
立花　「まあな。」
加藤　「十七歳でしたっけ。まだ子供ですよ。」

立花「…。」
加藤「しかも女の子じゃないですか。」
立花「十七歳の女の子だから隙を突かれたのもしょうがないってのか。」
加藤「あ…。」
立花「三党首立会演説会。最近抗争も激しくなってる。衝突は予想されてた。だから俺らも警視庁から借りだされてたんだよな。それでもこんなことになっちまった。違うか。」
加藤「そうでした…。」

短い間。

立花「お前は？」
加藤「え？」
立花「お前、何やってた？十七のころ。」
加藤「自分は…。」
立花「俺は、人殺してたよ。」
加藤「え？」
立花「一人なんてもんじゃない。何人殺したか覚えてないくらいだ。小銃構えて、少年志願兵なんて言われてな。そういう世代だろ、俺ら。」
加藤「でも、それは…。」
立花「変わんねえよ。」
加藤「…。」
立花「関係ねえだろ、歳なんかな。」

立花、資料を見ている。
蝉の声。
加藤、居心地悪げに指を動かしてみている。痛みに顔をしかめる。

立花「素手で掴んだんだってな。」
加藤「ええ、とっさに。」
立花「あのまま刃引かれてたら落ちてたんだと、お前の指。」
加藤「医者から聞きました。」

立花　「なんでだろうな。」
加藤　「え？」
立花　「害者の脇腹の傷は一発で致命傷だったのにな。」
加藤　「・・・。」

加藤、自分の指を見つめる。
立花、資料を閉じる。

立花　「さてと、そろそろかかるとするか。」
加藤　「はい。」

加藤、出て行く。

立花　「十七か・・・。」

立花、手にしていた煙草をゆっくりともみ消す。
窓を開けたらしく、蝉の声が少し大きくなる。
煙草の煙を振り払う仕草。

加藤、真を連れ、壇上へ上ってくる。

加藤　「山之内真、連れて参りました。」
立花　「ん。」

立花、立ったまま暫く真を見ている。
真も見返す。

立花　「昨日はちゃんと眠れたか。」
真　「はい。」
立花　「飯は。」
真　「いただきました。」
立花　「あんまりうまいもんじゃねぇだろ。」

真　「別に。」
立花　「そうか？まずいって、皆、文句ばかり言うぞ。」
真　「いえ別に。」
立花　「そうか。」

立花、黙って真を見つめる。
真も、引かずに見つめ返す。
加藤、少し居心地悪げ。

加藤　「座って。」

加藤、そういいながら、椅子を指し示す。
真、加藤の包帯に目をとめる。

真　「その手、あのときの？」
加藤　「ああ。」
真　「：痛みますか？」
加藤　「まだ薬が効いてるから、それほどでも。」
真　「そうですか。」

真、まだ加藤の手をじっと見ている。

加藤　「なに。」
真　「まさか、素手で刃を掴まれるとは思いませんでした。」
加藤　「夢中だったから。」
立花　「なんで、刃を引き抜かなかったんだ。そしたら振り払えただろ。」

真、驚いたように目を丸くする。

立花　「なんだよ。」
真　「だってそんなことをしたら、その人の指、なくなってしまいますよ。」
立花　「だから、刃を引かなかったのか。」

真　「はい。」
立花　「赤巌（あかいわ）さんの脇腹には、躊躇（ちゅうちょ）なく突き刺したのに、か。」

真、立花を見つめる。

立花　「ほぼ即死だったそうだ、赤巌委員長。」
真　「…亡くなったんですか…。」
立花　「意外か？」
真　「血が、出なかったから…。」
立花　「あの体格だ。脂肪で圧迫されて傷が隠されていたらしい。体内で大量に出血していたそうだ。」
真　「…。」

立花、真に近づく。

立花　「これでお前は立派な殺人犯だ。」
真　「…私は…。」
立花　「なんだ。」
真　「…。」
立花　「私は、なんだ。」

蝉の声が不意に無くなる。
うっすらと、階段傍に佇む聖に明かりが入る。

真　「私は、」
聖・真　「刺すならば必ず命を奪おうと決めてました。」

間。
明かりがテーブルのみに戻る。
蝉の声。

立花　「まあ、座れ。」

皆、椅子に座る。

加藤「えっと、まず、氏名の確認です。
山之内真、十七歳。間違いない？」
真「はい。」
加藤「君は、君の意志に反して、ここで供述する必要はありません。いいですか？」
真「はい。」
加藤「先月、十三日、日比谷公会堂で、三党首立会演説会中、共和党中央執行委員長、
赤巌弥太郎をジャックナイフにて刺殺。間違いはない？」
真「間違いありません。」
加藤「現行犯逮捕だから、否認も何もないとは思うけど、ここに至った経緯なんかを少
し聞かせてくれないか。」
真「はい。」
加藤「どうして、こんなことをしようと思ったの？」
真「どうして？」
加藤「自分で思いついて実行したの？」
真「はい。」
加藤「人から言われたり、相談したりしたことはない？」
真「はい。今回のことは、全く自分一人の信念で決行したことで、人に言われたり、
誰かに相談したことは絶対にありません。」
加藤「本当のこと、言ってくれないか？」
真「本当のこと？」
加藤「そう。現場には君だけじゃなくて他の人たちもいただろ？ほら、あの集会に反対し
てた、愛心党の・・・。」
真「白瀬先生。」
加藤「そうだ。彼に言われてやったんじゃないの？」
真「違います。」
加藤「よくあることなんだよ。上の人たちは君たちみたいな下っ端使って、ほら、聞い
たことない？鉄砲玉なんて言ってさ、自分たちは手を汚さないで。わかるだろ？」
真「・・・。」
加藤「本当のこと言いなさいよ。誰かに言われてやったって素直に言えば、罪も少しは

軽くなるかもしれないんだよ。」

真　「白瀬先生とは関係ありません。これは自分が一人で計画したことですから。」

加藤　「君さ、自分の言ってること、本当にわかってるの？計画して人を殺したなんてことになったら一番罪は重くなるんだよ。」

真　「知ってます。それに」

立花　「それに？」

真　「自分は罪を軽くしたいとは思っていません。」

立花　「死刑でも望んでんのか。」

真　「…もし、そうなることになっても後悔はしていません。」

立花　「赤巌さん浮かばれねぇな、自殺の道連れかよ。死にたきゃだれにも迷惑かけずに自殺でもなんでもすりゃあいいじゃねえか。」

真　「死を望んでいるわけじゃない。」

立花　「なに？」

真　「それは、罪です。」

立花　「罪ねぇ。」

真　「自分は、国を守るため、刃を抜いたまで。」

立花　「国を守る？ひとの命奪っておいて勝手なこと言ってんじゃねえよ！」

真　「戦争は？」

立花　「なに？」

真　「じゃあ、戦争は？

先の大戦で、国を守って大勢が命を落としました。それをしていたのは、あなたたちですよね？国を守るために誰かの命を奪う。同じことじゃないですか？」

立花　「あの時と今じゃ状況が違うだろ。」

真　「同じです。」

立花　「どこが？」

真　「わかりませんか？日本は、今、革命前夜にあるのです！」

加藤　「・・・革命前夜。」

真　「自分は、それを止めなければならないのです。」

立花　「それを止めるために赤巌さんを殺ったって、そういうことか。」

真　「はい。」

立花　「赤巌さんひとりが死んで、それで止まるのか、その革命とやらは。」

真　「この国は絶対に守らなければならない。どうあっても日本の赤化は止めねばなら

ないのです。そのためならば、自分は手段を択ばぬ覚悟です。」

立花　「それが、誰かの命を奪うことになってもか。」

短い沈黙。

真　「はい。」

鐘の音が鳴り響く。
場面が凍りつく。

【二の序】

聖が階段に腰かけている。膝の上には古ぼけた祈祷書。
聖の声と共に明かりがゆっくりと入ってくる。

聖　「憐れみ深い父なる神よ。私たちはしてはならないことをし、しなければならないことをせず、想いと、言葉と、行いによって、多くの罪を犯しています。どうか罪深い私たちをお赦しください。」

真が聖に近づく。立花と加藤は丸椅子（傍聴席でもあり証人席でもある）の方に移動する。

聖　「新しい命に歩み、み心に従い、み栄を表すことができますように、」

真・聖「救い主イエス・キリストによってお願い致します。アーメン。」

聖　「ようやく起きたの？お寝坊さん。」

真　「おはよう、兄さん。」

聖　「おはよう。またお祈りさぼるつもりだな。」

真　「いいじゃない、双子なんだから。兄さんがしてくれてたことは私がしたも同然よ。」

聖　「調子いいんだから。」

真　「へへへ。」

真、聖の顔を覗き込み、

真　「顔色、悪いね。眠れてないの？」
聖　「なんだか横になると目が冴えちゃって。」
真　「起こしてくれたらよかったのに。」
聖　「そんなこと言って。起こしても起きないんだろ。」

二人、笑いあう。
丸椅子から母が立ち上がり、テーブルに近づき、椅子に座る。
首にシンプルな十字架。手には白いハンカチを持っている。

母　「真、ご飯できたよ。」
真　「はーい。ほら、聖いこ。」
聖　「わかったわかった。」

真、聖に手を差し伸べようとする。聖も手を伸ばす。その手に白い包帯。

真　「まだ痛い？」
聖　「痛みはないよ。」
真　「ごめんなさい、私のせいで。」
聖　「真のせいじゃないさ。」
真　「でも…。」
聖　「ほら、早く行かないと父さんに怒られるよ。」
真　「…うん。」

二人、テーブルに近づこうとするが、聖の足が止まる。

真　「兄さん？」
聖　「…。」
真　「どうしたの？兄さん。」

聖　「・・・。」

真　「兄さん？」

階段に蹲（うずくま）る聖。

抱きかかえるように、そのそばに跪（ひざまず）く真。

二人の姿が、影にのまれる。

【二】

椅子に腰かけている母。

俯いて指を組んでいる。

加藤、立花、丸椅子から立ち上がって、ひな壇へ上がってくる。

母、弾かれたように立ち上がる。

立花　「お待たせしました。」

母、その足元に土下座し、頭を下げる。

母　「あの、この度は娘が大変なことをしてしまって・・・本当になんとお詫びをしたらいいのか・・・本当に申し訳ありません！申し訳ありません！」

申し訳ありませんと繰り返す母親。立花、傍らに膝をつき、

立花　「山之内さん、山之内さん、落ち着きましょうや。ね。」

母　「・・・。」

立花　「ちょっとお話聞かせていただいても？」

母　「・・・はい。」

立花、母を助け起こして、椅子を勧める。

加藤、椅子を引いてやる。
母、小さく頭を下げ、座る。
白いハンカチを取り出し、涙を拭き、小さく深呼吸をする。

立花「落ち着きましたか？」

母、小さく頷く。

母「あの・・・真は？」
加藤「食事も睡眠もきちんととってますよ。驚くくらい、落ち着いてます。」
母「そうですか。ご飯、食べられてるんですね。よかった。」
加藤「・・・。」
母「・・・身勝手な親だと思っていらっしゃいますよね？でも、やっぱり気になってしまって・・・。あの、あの子の好物を拵えてまいりました。渡していただけませんか？」
加藤「お預かりします。お、いい匂いだ。」
母「砂糖菓子ですの。あの子、昔から甘いものに目が無くて・・・。」
立花「真さん、どんなお子さんでした？御兄弟は、確か・・・。」
母「はい。双子の兄がおりました。とても仲が良くて、いっつも一緒にいました。真はとても甘えん坊で。」
加藤「へえ、甘えん坊？」
母「今じゃ別人のようです。真は、随分変わってしまいました。」
立花「なにかきっかけになるようなことは？例えば、お兄さんのこととか。」

鐘の音。階段に聖の影が浮かぶ。

母「いいえ。あの時もあの子は妙に落ち着いていました。私の方が取り乱してしまいまして・・・。むしろずっと支えてくれました。学校もしばらく休んでいましたが、すぐにまた行くようになって・・・。」
立花「そうですか。」
母「ただ・・・。」
立花「ただ？」

丸椅子から、突然父が立ち上がる。

父　「どなたかおられますか？」

立花、加藤、顔を見合わせる。

母、手にした白いハンカチを握りしめる。

立花、そんな母の様子を横目に、加藤に合図する。

加藤　「はい。なんでしょう？」

父　「山之内です。家内がこちらにお邪魔していると聞きまして。」

加藤　「あ、いらしてます。」

父　「お邪魔しても？」

加藤　「あ、どうぞどうぞ。」

父、ひな壇上に入ってくる。

父　「突然すみません。山之内真の父です。」

立花　「この事件を担当しております、警視庁公安部公安第二課の立花警部補です。」

加藤　「同じく加藤巡査部長であります。」

父　「この度は娘が大変ご迷惑をおかけしまして。」

父、二人に堅苦しく頭を下げる。

慌てて一緒に頭を下げようとする母に向かい一喝する。

父　「あれほど家から出るなと言っただろう！」

母　「私、真に差し入れを・・・。」

父　「何悠長なことを言ってるんだ。あいつは今や犯罪者なんだぞ！わかってるのか！全く、皆さんお忙しいんだ。勝手なことをするんじゃない！ほら、早く帰るぞ。本当にお時間取らせまして。」

父、母の腕を強引につかんで連れ出そうとする。

加藤　「そんな乱暴な。」
立花　「まあまあ、良かったら、お父さんも、少し、お話お伺いできませんかね。せっかくいらしていただいたんですから。いかがですか？」
父　「取り調べ、ですか？」
立花　「いや、それはまたいずれ正式にお時間いただくとして。どうですか、少しだけ。」
加藤　「あ、こちらどうぞ。」

加藤、父に椅子を勧める。父、渋々腰かける。

加藤　「お母さんも、さあ。」
母　「ありがとうございます。」

皆、それぞれの椅子に座る。

加藤　「今、ちょうど、奥様にお話伺おうとしてたところなんですよ。」
父　「何か話したのか？」
母　「私・・・。」
加藤　「真さんの様子をお伝えしていたところにお父様がいらしたので、まだ何も。」
父　「立花さんとおっしゃいましたっけ。」
立花　「はい。」
父　「まず、ご理解いただきたいのですが、私はあの子の親ではありますが、すでにあの子を一個人として扱っています。あの子たちが、どんなものに興味を持とうが、何を信じようが、自由にさせてきました。ただ、人様に迷惑だけはかけるなと、それだけはきつく言い聞かせてきたつもりです。まさか、人様に刃を向けるようなことをしでかすとは・・・。」
立花　「なるほど。随分進んだ考えをお持ちのようですね。」
加藤　「お父さんは、ご職業は確か・・・。」
父　「自衛官ですが、それがなにか。」
加藤　「ご自宅で、真さんとお仕事や政治のお話はされましたか？」
父　「うちに群がってくる記者どもと同じことを聞かれるのですね。私が真に入れ知恵をしたと、そうおっしゃりたいのですか？」
加藤　「や、自分はそんな・・・。」

父　「自衛官だから、娘が右翼なんかに走るんだとそう決めつけるのですか？」
加藤　「そんなことは一言も。」
父　「私は自由主義のもと、あの子たちを教育してまいりました。本人たちの考えのもと、やりたいことをやらせ、選びたいという道を選ばせてきたつもりです。その結果、あの子のたどり着いた道が、今回の事件につながっていたのだとしたら、亡くなられた赤巌さんには大変気の毒なことをしたと心底思ってはおりますが、それは、もう、あの子の選んだことなので、自らその責任を全うしてほしいと、そう、考えております。」
立花　「子供のしたことだから、自分には関係ないと、そうおっしゃるわけですね。」
父　「これは心外だ。そう取られましたか。」
立花　「そういう風にしか聞こえませんでしたがね。」
父　「さすが評判の公安部ですな。どう返事しても角が立ちそうだ。」
加藤　「ちょっと、言いすぎじゃないですか！」
立花　「加藤、お母様を真さんのところへお連れしろ。」
加藤　「え？」
立花　「お差し入れお持ちいただいただろう。」
加藤　「しかし、まだ面会は・・・。」
立花　「大丈夫だ。少しの時間くらいいいだろ。何かあったら俺が責任を持つ。」
加藤　「・・・わかりました。さあ、こちらへ、ご案内します。」
母　「でも・・・。」
立花　「遠慮なく。」

父も一緒に行こうと腰を浮かす。

立花　「お父様は、ここでもうしばらくお話ししませんか？」
父　「・・・いいでしょう。」
立花　「あ、一服いかがですか？」
父　「や。結構。」
立花　「私は、ちょっと失礼してもよろしいですか？」
父　「どうぞ。」

立花、煙草に火をつける。

父、無意識に指でテーブルを叩く。

立花「吸わないんですね。」

父「ああ、数年前にやめました。体に悪いと家内があんまり言うもんだから。」

立花「そうですか。」

と言いながら、煙を吐き出す。

立花「家では、どんな様子でした?真さん。」

父「何度も言うようだが、取り調べでしたら正式な手続きを踏んでいただきたい。」

立花「いえね、うちにも娘が二人いましてね。一人はちょうど年頃で、最近何かと突っかかってくるんですよ。どうしたもんかと思いましてね。」

父「・・・。」

立花「昔はあんなにべたべた引っ付いてきたのに。つまらんもんですね、娘なんて。」

父「・・・真は小さい頃から、なかなか私に懐いてきませんでした。」

立花、煙草をもみ消し、向かいの椅子に座る。

父「戦時中に、妻は、南方に行かされていた私の写真を箪笥の上に置いて、これがお父さんだよと子供たちに言って聞かせていたそうで。おかげで、やっとの思いで内地に戻って、喜び勇んで家に帰ったのに、しばらくは私のことを「おじさん」としか呼ばないんですよ。あの子たちにとっては写真の私が「お父さん」だったんですね。」

立花「そうですか。」

父「親の欲目かもしれませんが、真は、家では本当に物分かりの良い優しい子でした。私はあの子に向かって、声を荒げたことも、手を上げたことも一度だってありません。真が人様の命を奪ったなんて・・・勝手な言い草だとは思いますが・・・。」

短い沈黙。

立花「双子のお兄さんがいらしたそうですね。」

階段上にうっすらと明かりがともり、少年を照らし出す。

父　「聖（きよし）というんですが、生まれつき線の細い体の弱い子でした。仲良かったですよ、真と聖は。私の仕事柄、転勤も多かったから、他に友達ができなかったせいもあるのかもしれませんが。いっつも二人一緒で。兄さん、兄さんて、そばを離れないんですよ。甘えてばかりで。」

立花　「今の真さんとはずいぶん印象が違いますね。」

父、黙って頷く。

立花　「国を守るために刃を取ったと、真さん言っていました。昔からそんなようなこと口に出してましたか？」

父　「いたって普通の子供でしたよ。」

立花　「チャンバラとか、男の子の遊びが好きだったりは？」

父　「いいえ。どちらかといえば聖が真に付き合わされて二人でままごとばかりしていました。」

立花　「ほう。」

父　「でも、おとなしかったかっていうとそうでもなくて。真には、昔から正義感の強いところがありましてね。近所の大人にからかわれて、とびかかっていったことがありました。逆にやられて傷だらけになって帰ってきましたよ。止めようとした聖も指を怪我して・・・。」

立花　「指を、怪我ですか・・・。」

父　「・・・。」

立花　「・・どうしました？」

父　「あ、いえ、別に・・・。」

短い沈黙。

父　「そういえば二人がよくしていた、変わった遊びがありましたよ。」

立花　「どんな遊びです？」

父　「家内が熱心なクリスチャンなんですが、それで興味を持ったのか・・・。いえ、ちょっとしたお芝居ごっこなんですが、聖書の場面を再現するんですよ。二

人でね。古いカーテン引きずってきて衣装にしたりして。こいつがなかなか大がかりでしてね。」

立花　「へえ。」

父　「家内なんて喜んでしまって、この子たち、二人そろって役者になるんじゃないかしらなんて言って、バカな夢見てましたよ。」

立花　「そうですか。」

父　「そういえば、二人のお気に入りはキリストが処刑される場面でした。なんでしたっけ、あの十字架を背負って登らされた・・・。」

立花　「ゴルゴダの丘・・・。」

鐘が鳴り響く。
場面が凍り付く。
階段に少年の影が伸びる。

立花、父、証人席へ。
母、再びひな壇上の椅子に。
両脇の柱の影がひな壇上にかかっている。
テーブルが檻の中のように見える。
加藤が真を連れてくる。
母、真を見て、弾かれたように立ち上がる。

母　「真！」

真、黙って頭を下げる。

加藤　「お母さん、心配していらしてくださったよ。」

母　「真・・・。」

真　「ご迷惑をおかけしてすみません。」

母　「砂糖菓子焼いてきたの。好きでしょ？」

真　「ありがとうございます。」

母　「それと、あなたの祈祷書持ってきてみた。ずっと家に置きっぱなしだったでしょ。昔はあんなに大事にしていたのに。」

真　「・・・ありがとう。」

真、祈祷書と、菓子の包みを受け取る。しばらく、祈祷書を見つめる真。

母　「かわいそうにねぇ、こんなところに入れられて。」

真　「自分がしたことなので。」

母　「そう。そうね。」

沈黙。

母　「真、早く本当のこと、話して。ね。そうすればお家に帰れるから。」

真　「本当のこと?」

母　「あなたがこんなことする子じゃないって、母さんよーく知ってる。何か事情があるのよね。ちゃんとわかってる。あなたがちゃんと話せば刑事さんたちだってわかってくれるから。ね。」

真　「母さん、ごめんなさい。今回のことは本当に私が・・・。」

母　「そんなわけないじゃない！あなたはそんなひどいことのできる子じゃない。母さん、ちゃんとわかってます。あなた、庇ってるのよね。あの男でしょ?そうでしょ?ひどい男！私たちから真を取り上げて、挙句にこんなことやらせるなんて！」

加藤　「奥さん、落ち着いて。」

母　「刑事さん、どうか、どうかわかってあげてください。この子はたぶらかされているだけなんです。悪いのは、白瀬とかいうあの男」

真　「母さん。」

母　「あの男がやらせたんです。きっとそうよ、そうなんだわ。刑事さん、お願いします。ちゃんと調べてあげてください。真を助けてあげてください！」

加藤　「奥さん、落ち着きましょう。ね。大丈夫、ちゃんと調べますから。ね。」

母　「真を助けてあげてください！」

加藤、泣きわめく母を連れて出て行く。

その後ろ姿に。

真　「母さん、会いに来てくれて、ありがとう。大丈夫、私は元気だよ。お菓子もちゃん

と食べるね。」

真、祈祷書を手にゆっくりと階段に向かう。

真　「憐れみ深い父なる神よ。私たちはしてはならないことをし、しなければならないことをせず、想いと、言葉と、行いによって、多くの罪を犯しています。どうか罪深い私たちをお赦しください。」

鐘の音。

【三の序】

階段に明かりが灯る。

真、聖、父と母。

真と聖はそれぞれ布やボール紙で簡単な仮装。

父と母は、聴衆として参加。幸せな団欒。

「ヨハネによる福音書」のお芝居である。

聖、真、お辞儀。

父母、拍手。

聖（ピラト）「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出すが、それはこの人になんの罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」。

真、段ボールのいばらの冠に紫の上着で出てくる。

聖（ピラト）「見よ、この人だ」。

父母　「十字架につけよ、十字架につけよ」

聖（ピラト）「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」

母　「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」。

聖（ピラト）「あなたは、もともと、どこからきたのか」

真　「・・・。」

聖（ピラト）「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」。

真　「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。だから、わたしをあなたに引き渡した者の罪は、もっと大きい」。

聖、真、お辞儀。

父母、拍手。

【三】

明かりがひな壇に戻る。

テーブルの上に資料。灰皿。

立花が座っている。

加藤、入ってくる。

立花　「よ、おつかれさん。」

加藤　「全く他人事（ひとごと）なんだから。いやあ、参りました。」

立花　「大変だったんだって？」

加藤　「とんだ貧乏くじですよ。大騒ぎだったんですから。」

立花　「それで？」

加藤　「はい。やっぱり母親の方は白瀬の関与を疑ってます。たぶらかされたって言ってましたよ。」

立花　「たぶらかされたねぇ。そんな玉にゃ見えねえけどな。」

加藤　「落ち着いてるように見えたって、しょせん十七の小娘なんですよ。あんな大それたこと一人で考えられるわけないですって。」

立花　「俺はそうは思わん。」
加藤　「白瀬が裏で糸ひいてるんですよ、絶対。」
立花　「あの男がこんな危ない橋渡るとも思わんけどな。」
加藤　「どうです、そろそろ一回カマかけてみませんか。」
立花　「気が進まんなあ。」
加藤　「大丈夫ですって。今度こそ尻尾捕まえて見せますよ。」
立花　「そうまで言うなら好きにすりゃあいい。連れてきてみればいいじゃねえか。」
加藤　「見ててくださいよ。」

加藤、喜び勇んで出て行く。
白瀬、丸椅子から立ち上がる。
加藤と白瀬、ひな壇へ。
二人、テーブルの方へ。

白瀬　「これはこれは立花さん、相変わらずお元気そうで。」
立花　「まあな。」
白瀬　「何をお話しすればよろしいですかな。私がお役に立てるんでしたらなんなりと、もちろん協力は惜しみませんよ。」
加藤　「じゃあ、早速。先日の日比谷の・・・。」
白瀬　「公会堂の件でしたら、わざわざ立花さんが出てこられるまでもないでしょう？彼らと我らの衝突など、まさに日常茶飯事なんですから。今回の件も、威力業務妨害、ですかな？その程度のものでしょう。」
加藤　「山之内真。ご存知ですよね？」
白瀬　「もちろんですよ。真ちゃんは娘同然ですから。まさか、あんなことをしでかすなんて。赤巌さんには本当に気の毒なことをしました。」
加藤　「なんであんな子が今回みたいな大胆なことしたんですかね。誰か入れ知恵した人がいるんじゃないですかね。」
白瀬　「確かに思い詰めると何をしでかすかわからないような危うさは持ってはいましたが、まさか、あんなことになるとは・・・。手元に置いていながら、止めること叶いませんでした。悔やんでも悔やみきれません。」

白瀬、男泣きに泣く。

立花　「白瀬先生お得意のマスコミ戦法かい。相変わらず食えねぇなぁ。」
白瀬　「立花の旦那には通用しませんか。」
立花　「なあ、白瀬さん。ちょっと腹割って話さねぇか。あんたのとこの党員、何人しょっ引かれたんだ。」
白瀬　「九人（くにん）。」
立花　「よし、加藤、そいつら帰してやれ。」
加藤　「え、ちょっと。」
立花　「その代わり、あんたにはちょっと協力してもらうぜ。どうだい。」
白瀬　「立花の旦那には敵いませんなぁ。その代わり、必ず正面から帰してやってくださいよ。」
立花　「ブンヤどもへのサービスかい？抜かりねぇなぁ。」
白瀬　「今の世の中、こうでもしないと我々などは生き残れはしませんよ。世間の風は今まさに完全に逆風ですからね。」
立花　「革命前夜、かい？」
白瀬　「・・・よくご存じで。」

間。

加藤　「山之内真、愛心党の構成員でしたよね？」
白瀬　「いやですねぇ、味気ない。家族、と言ってください。真ちゃんは娘同然です。ま、正式にはすでに除籍になってるんですがね。」
加藤　「除籍？」
白瀬　「はい。事件の起こる一週間前くらいですかね。本人が急に言い出しまして。説得したんですが、どうしても聞き入れてくれなくてね。泣く泣く実家に帰しましたよ。」
加藤　「理由は？」
白瀬　「学校に戻りたくなったと言ってました。もともと、本来ならば学校に通ってる年頃ですからね。反対はできませんよ。親御さんからも本人が学業に戻りたくなったらいつでも返すって、そういうお約束でお預かりしていたんですから。」
加藤　「そんなこと言って、トカゲのしっぽ切りみたいなもんでしょ？事前に自分のとこに火の粉が降りかからないようにしたんじゃないですか？」
白瀬　「その辺の田舎やくざじゃあるまいし、この白瀬采女（うねめ）、そんな安っぽい手は打ちませ

んよ。」

立花「確かにな。あんたが今回のような危ない橋渡るとはどうも思えん。」

白瀬「さすが立花さん、よくわかっておいでだ。」

立花「本当に今回の赤巌さんの件、関わってないんだな。」

白瀬「はい。」

しばらくお互いを探る二人。

立花「わかった。あの子を預かるようになったいきさつから聞かせてもらおうか？」

白瀬「ああ、今でも目に浮かぶようですよ！新宿駅前広場でね。私がトラックの荷台でいつも通り演説をしていたその最中でした。」

明かりが変わる。雑踏。

丸椅子の証人たちがテーブルの周りを囲む。

白瀬、ゆっくりとテーブル上に上がる。

白瀬「いいですか？ソ連、中共は、日本を赤化しようとしているのですよ。彼らの思想は、共和党、労働組合、全学連、母親大会といった形でも存在している。彼らは、ソ連、中共と同列ですぞ！彼らは、平和については語るが、自由については口を閉ざす。それは、彼らの国に自由がないからです。資本主義を倒すのは悪いことではない。むしろ、良いことかもしれない。しかし、彼らのやり方で倒してはいけないのです。日本には日本のやり方があるんです！にもかかわらず、彼らは大衆をデモやストライキに駆り立てようとする。法を無視し、集団暴力をふるっているのに、警察は取り締まることさえできない。マスコミは彼らに洗脳され、政府は私利私欲に走っている。皆さん、この日本をどうするんですか！」

聴衆から、ヤジと喝采。

白瀬「最早、日本は革命前夜にあるといっても過言ではない！青年は今すぐ起って彼らと対決しなければならない！」

湧き上がる喝采。

その瞬間、聴衆を掻き分けて、真がテーブルに飛び乗ってくる。
思わず真の手を取る白瀬。
二人を残し、聴衆はゆっくりと傍聴席に。
白瀬もテーブルを降り、場面は取調室に戻る。

白瀬「真ちゃんのあの時の顔は忘れられません。紅潮した頬にきらきらと目を輝かせて。でも、実際あの行動力には、少し怖いものがありました。」
加藤「コワい？」
白瀬「ええ。なんというか、純粋を通り越した、ものすごく張り詰めた弦のような。危うさといいますか。」
立花「危うさねぇ。」
白瀬「はい。」
立花「それでも、手元に置くことにしたんだな。」
白瀬「はい。」
立花「なんでだ？」
白瀬「と言われますと。」
立花「白瀬さんよ、俺とあんたは昨日今日の間柄じゃねぇよな。」
白瀬「そうですねぇ。思えば、随分長くお付き合いいただいてるもんだ。」
立花「全く、嫌になるくらいだよ。」
白瀬「ま、お互い様ってところですかね。」
立花「だから、俺にはどうもわかんねえんだよ。反共保守の先鋒を担うあんたがなんでわざわざ爆弾抱え込んだのか。」

沈黙。

白瀬「歳をとったんですかね・・・。」
立花「・・・。」
白瀬「・・・あの日、新宿で初めて会った日から、ちょうど二日たった日曜日でした。真ちゃんが家を訪ねてきたんです。」

証人席から真、白瀬彌生（やよい）、立ち上がり、テーブルへ。
立花、加藤、証人席へ。

真　「先生の話を聞いて、日本は非常のときであると強く感じました。今から運動に加えてください。もうぐずぐずしていられません。」

彌生　「お名前は？」

真　「山之内真と言います。」

彌生　「おいくつ？」

真　「十七になりました。」

彌生　「十七歳って言うと・・・。」

真　「高校三年生です。」

二人、顔を見合わせる。

白瀬　「それなら卒業してからの方がいい。未成年の君をまるで誘拐するようにして運動に引き込むことはできないよ。」

彌生　「親御さんも心配するでしょうしねぇ。」

白瀬　「そうだ。親に心配かけるのは人の子として取るべき道ではないよ。」

頷きあう二人。

白瀬　「愛心党の運動は国を愛すること、つまりは愛国運動だ。愛国運動に挺身するためにはちょっとした気まぐれだけでは到底やり続けられない。もっと広い知識と修養が必要なんだ。」

彌生　「悪いことは言わないから、せめて高校は卒業してからおいでなさいな。」

白瀬　「焦らなくてもいい。運動は今で終わるわけではないから。」

彌生　「そうですよ。大学に行ってからでも、ねぇ。」

白瀬　「そうだ。その通り。」

真　「どうしてですか？先生は、彼らの勢力は今日明日にも日本を潰してしまうとおっしゃったじゃないですか？日本は革命前夜にあるんですよね？彼らは新世界の王になろうとしているんですよね？学校にいて、勉強するなんて、そんなことどうしてできますか！そんな暇はありません！」

二人、顔を見合わせる。

白瀬　「例えば、いくらかわいそうに思う気持ちがあっても、知識がなければ医者は患者を救うことはできないだろう。医学を勉強して、初めて医者として患者を救えるんだ。わかるかい？」
真　「はい。」
彌生　「お母さまやお父さまがあなたに期待していらっしゃることもあるんじゃないかしら。」
白瀬　「女子だからと言っても、今の世の中、大学くらい行った方がいい。そのうち思慮も深くなるし、正しい判断もつくようになるから。」
彌生　「そうね。そしたらまたいらっしゃいな。」
真　「大学を出ていなければこういう運動はできませんか？」
白瀬　「いや、そういう訳ではなくて・・・。」
真　「それならいいじゃないですか！」
白瀬　「しかし・・・なあ。」
彌生　「あなたも人の子ならば、お父さんとお母さんの承諾を受けてからになさい。話はそれからです。」
真　「・・・わかりました。」

真、出て行く。

彌生　「全く、今の子は何を考えているんでしょうね。」
白瀬　「・・・。なあ、あの子、また来るんじゃなかろうか。」
彌生　「何度来たって一緒ですよ。あんな子うちに置いてごらんなさい。世間の人たちに何て言われるかわかったもんじゃありませんよ。未成年で、しかも女の子なんて！わざわざ爆弾抱え込むようなもんじゃないですか。」
白瀬　「美しかったな・・・。」
彌生　「は？」
白瀬　「美しかった・・・。」
彌生　「は？なに言ってんですか？」
白瀬　「いやなに、容貌の美醜を言ってるんじゃない。あの純粋でまっすぐな目だ。我らがどこかでなくしてしまったような・・・。」
彌生　「・・・だから危ないって言ってるんじゃないですか。」

白瀬　「え？」
彌生　「とにかく、私は反対です。絶対うちで引き取るようなことしないでくださいよ。わかりましたね。」
白瀬　「・・・はい。」
彌生　「わかりましたね！」
白瀬　「はい。」

彌生、白瀬を残して丸椅子に戻る。
立花、加藤、戻ってくる。

白瀬　「うちを訪ねてくる若者は、年に何人もいます。でも、そういう若者たちと、真ちゃんはどこか違っていた。何だったんでしょうね、あれは。」
立花　「あんたはそれを何だと思う。」
白瀬　「そうですねぇ。うまく言葉がみつかりませんが・・・。」
立花　「口八丁でマスコミ手のひらで転がす、白瀬采女先生がかい？」
白瀬　「嫌ですねぇ、やめてくださいよ。そうですね、まるで彼女の目は、あれのようでした。真っ直ぐでただ一心な。」

一瞬の沈黙。

白瀬　「殉教者。」

【四の序】

階段に明かりが移る。
祈祷書を読む聖。

聖　「しかし、彼らがイエスのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。

しかし、ひとりの兵卒が槍でその脇を突き刺すと、すぐ血と水とが流れ出た。
それを見た者があかしをした。そして、そのあかしは真実である。その人は、自分が真実を語っていることを知っている。それは、あなたがたも信ずるようになるためである。」

真　「起きてたの？」
聖　「なんだか眠れなくて。」
真　「・・・傍にいようか。」
聖　「うん、ありがとう。」
真　「ヨハネによる福音書？」
聖　「そう。」
真　「兄さん、好きよね。」
聖　「昔、よく二人でお芝居したよね。覚えてる？」
真　「忘れるわけない。母さんは大まじめで見てるのに、父さんたら最後はふざけて、『十字架にかけよ』とか言って追いかけてくるの。」
聖　「真ったら本当に怖がって泣いたりして。」
真　「だって、父さん変な声出すんだもん。」
聖　「ねえ、真、ロンギヌスの槍って知ってる？」
真　「ロンギヌス？」
聖　『ひとりの兵卒が槍でその脇を突き刺すと、すぐ血と水とが流れ出た。』この兵卒の名前がロンギヌス。その時イエス様を刺したのがロンギヌスの槍っていうんだよ。」
真　「へえ。この人、名前あったんだ。」
聖　「この槍には伝説があるんだけどね。知りたくない？」
真　「知りたい。」
聖　「この槍を手に入れたものは、新世界の王になれるっていうんだ。」
真　「新世界の王？」
聖　「だから、ヒットラーとかも皆手に入れようとしたんだって。」
真　「すごいね。新世界の王か。」
聖　「なんだかわくわくするだろ？」
真　「だから、この後の言葉があるのかなぁ。『彼らは自分が刺し通した者を見るであろう。』」
聖　『彼らは自分が刺し通した者を見るであろう。』」
真　「私、この言葉なんだか怖くて・・・。

それに不思議だよね。なんでこの・・・。」

聖　「ロンギヌス？」

真　「ロンギヌスは、もう死んじゃってるイエス様を槍で刺してみたんだろ。」

聖　「それはきっと・・・。」

聖の言葉が、鐘の音にかき消される。

【四】

先生と生徒がどこか嬉しそうに丸椅子から立ち上がる。多分出番をずっと待ってたんだと思う。

連れだってひな壇に上がってくる。

生徒、差し入れらしい紙袋を持っている。

先生　「いいかい、進藤。君の役割は非常に大きい。なぜなら、山之内君には今、なんの寄る辺も残されていないからだ。わかるね。」

進藤　「はい、先生！」

先生　「よし、いいぞ、進藤。君は、真っ黒に閉ざされてしまった山之内の心に灯る一筋の灯り。必ず、山之内を救ってあげてほしい。」

進藤　「先生、私、少し怖い。」

先生　「そうだろう、そうだろう。しかし、何も恐れてはいけない。僕らは崇高にして、どこまでも正しい行いをしようとしているのだからね。」

進藤　「はい、先生。」

先生　「山之内は幸せだなぁ。君のような親友が傍に寄り添ってくれているのだからね。進藤、僕からも頼む。山之内を救ってくれたまえ。」

進藤　「はい、先生、私、頑張ります！」

先生　「よし、その意気だ。」

加藤、入ってくる。二人、ちょっとビビる。

加藤　「あ、お待たせしました。警視庁公安部公安第二課の加藤巡査部長です。」
先生　「栄光学園高等部で教員をしております、川村です。山之内真君の担任をしています。」
進藤　「山之内さんのクラスメイトの進藤由紀です。」
加藤　「えっと、今日はどのようなご用件で。」
進藤　「あの、真ちゃんに会えないでしょうか？」
加藤　「それがですね、まだ面会は許されてないんですよ。」
先生　「そこを何とかお願いできませんでしょうか？進藤は、山之内の親友でして。」
加藤　「親友？山之内の？」
進藤　「はい。」
先生　「事件を知って、すぐに駆けつけてきたとこういう訳なんですよ。」
進藤　「私、真ちゃんがあんなことするなんて、信じられません！」

進藤、泣く。

先生　「あの事件があってから丸三日、何ものどを通らないんだそうです。」
進藤　「真ちゃんが心配で。」
先生　「夜も眠れないみたいで。」
進藤　「寝ようとすると、真ちゃんが一人で泣いてる夢を見るんです。」
先生　「何とか会わせてあげられないでしょうか？」
加藤　「いや、そう言われてもねぇ。」
進藤　「お願いします、刑事さん、私、真ちゃんに会いたい！」
先生　「私からも、どうかお願いします。」
加藤　「あららら、弱ったなぁ。」

お願いしますお願いしますと繰り返す二人。
困る加藤。
立花、入ってくる。

立花　「どうしたどうした。」
加藤　「あ、立花さん。」
先生　「山之内真の担任の川村です。」

進藤「親友の進藤です。」
二人「真さんに会わせてください。お願いします！」
立花「親友？」
進藤「はい！」
先生「進藤と山之内は無二の親友です。」
進藤「そうです。無二の親友です。」
立花「へえ、あの子に親友。なるほどねぇ。」

短い間。

立花「ま、いいんじゃねえか。加藤、お嬢さんをお連れしろ。」
加藤「ちょっとちょっと、いいんですか」
立花「ただし、先生は、ここで私とお話しましょうや。どうです？」
先生「わ、わかりました。」
進藤「せ、先生。」
先生「大丈夫だ、進藤。先生は大丈夫だ。ここは任せたまえ。」
進藤「でも、私・・・。」
先生「大丈夫。進藤ならきっとできる。山之内に君のその明るい笑顔をしっかり届けるんだ、頑なになった山之内の心を、救ってあげられるのは、君だけだ。」
進藤「はい、先生！」
先生「頼んだぞ、進藤！」

進藤、先生、大袈裟に別れる。
進藤、加藤に連れられて出て行く。
先生、いつまでも手を振っている。

立花「先生、先生、どうぞこちらへ。」
先生「あ、はい。」

先生、落ち着かない。

立花「改めまして、この事件を担当してます、警視庁公安部の立花です。」

先生　「栄光学園で社会科の教員をしています、山之内真の担任の、川村です。」

二人、何となくお辞儀。

先生　「暑いですね、ここ。」

立花　「そうですか。すみませんね。私らは慣れてしまって。扇風機でもあればいいんですが。余計なものは置けない決まりなんですよ。」

先生　「そうなんですか？」

立花　「何が被疑者を刺激するかわからないっていうんでね。鉛筆が尖ってるのもダメだとか、刃物なんかもってのほかですしね。」

先生　「そういうもんなんですね。」

立花　「特に今回は。被疑者が若いんで上の方も何かと気を遣ってるんでしょ。」

先生　「なるほど。」

沈黙。落ち着かない先生。

明かりが変わり、立花、先生、証人席へ。

加藤、進藤入ってくる。

両脇の柱の影が机に伸びる。

進藤、紙袋を抱きかかえるように持っている。

加藤　「ここで少し待っていて。」

進藤　「はい。ありがとうございます。」

加藤、出て行く。

進藤、紙袋を覗いて、また閉じたりしている。

加藤、真を連れて入ってくる。

進藤、気まずそうに頭を下げる。

真もなんとなく頭を下げる。

加藤、二人を不審げに見比べる。

加藤　「え？え？」

進藤「・・・。あ、山之内さん、久しぶり。」
真「進藤さん？誰かと思った。」
進藤「会いに来てみた。」
真「わざわざありがとう。」
進藤「あのね、庭のスモモがたくさんできたの。好きかどうかわからなかったけど。」
真「あ。ありがとう。」

沈黙。

真「一人で来たの？」
進藤「川村先生と。」
真「ああ。」

二人、黙り込む。

加藤「あの、二人は・・・親友なんだよね？」
真「え？」
進藤「あ、私は、そう思ってたんだけど・・・。」
真「え？知らなかった。ほとんど話したことなかったよね。」
加藤「そうなの？」
真「私、途中編入だったし、選択科目も違ったし。」
加藤「そうなの？」
進藤「え、でもでも、覚えてない？音楽は一緒だったよ。」
真「そうだけど、班が違ったから。」
加藤「そうなの？でも、進藤さん、事件があってからずっと何ものど通らないくらい心配してたって・・・。」
真「そうなの？」
進藤「・・・。」

進藤、微かに頷く。
二人、また黙り込む。
加藤、居心地悪げ。

真　「差し入れ、ありがとう。スモモ、うれしい。昔うちの庭にもあったんだ。」
進藤　「そうなの？」
真　「何度目の家か忘れちゃったけど、よくお兄ちゃんと木に登って採って食べた。」
進藤　「うちのは毎年いっぱい採れるよ。少し酸っぱいけど。」
真　「私、皮剥いてもらって、お塩少しつけて食べるの、好きだった。」
進藤　「わかる。少し、甘くなるんだよね。」
真　「塩つけるの嫌いな人もいるけど、私は好き。」
進藤　「私も好き。」
加藤　「剥いてあげようか？」
真　「ナイフ、貸してくれれば自分でできますよ。」

加藤、進藤、ハッとしたように真を見る。
進藤、思わず身体を引く。

真　「どうしました？」
加藤　「刃物を、君に渡すわけにはいかないんだ。」
真　「どうして？」
加藤　「わからないのか。」
真　「え？」

真、二人の様子を不思議そうに見て。
やがて納得したように。

真　「そうか、そうでしたね。私は、人を殺したんでしたね。」

明かりが変わる。
立花、川村。

立花　「どんな生徒でした？」
川村　「え、はい？」
立花　「山之内真。」

川村　「あ、ああ。そうですね、私のような教育者としては、こんな言い回しは非常に不本意なんですが、ま、一言で言うと問題児、ですかね。」

立花　「ほう。」

川村　「ここだけの話、私は家庭環境に少しばかり問題があるのではないかと、こう思っているんですねぇ。父親が、ほら、自衛隊幹部でしょう？母親も変わり者だそうじゃないですか。でもね、そんな環境で育ちながらも、山之内は健気にも頑張っていたと、私はそう思うんですが・・・。いやあ、しかし、悲しいかな、環境に抗えなかったというか。」

立花　「そうすると、先生は両親の影響で山之内が犯行に走ったとお考えなんですね。」

川村　「もちろんです、もちろんです。他にどんな理由があるというんですか。」

立花　「思春期ですからね、いろんな要因が考えられるんじゃないですかね。例えば、学校とか。」

川村　「失敬な。我が校は伝統と格式を誇る正当なミッションスクールですぞ。学校での生活に問題などあるわけがないじゃないですか？」

立花　「確か山之内は編入ですよね。」

川村　「そうですそうです。父親の転勤で方々行っていたようですね。それも良かったのか悪かったのか。もちろん、どんな問題があろうとも、教育の庭において、神の愛の下（もと）では平等です。ですから、時には、山之内のような難しい生徒を引き受けざるを得ない場合もあるのです。あの当時、随分荒んでましたからね、山之内は。」

立花　「あの当時？」

川村　「亡くなったんですよ、双子のお兄さんが。仲良かったらしくて、それで環境を変えた方がいいだろうってうちの学校に来たらしいんですがね。」

立花　「どんな様子だったんですか？」

川村　「最初はただふさぎ込んでるだけでした。特に問題も起こさない代わりに、誰とも深く関わらないような。それがいつからか、問題を起こすようになって。」

立花　「問題？」

川村　「ええ。随分反抗的になって。私にも噛みついてきたことがありましてね。今にして思うと今回の騒ぎを起こすような危うさは最初からあったんでしょうねぇ。桑原桑原。」

立花　「最初から？」

川村　「ああ、もちろん、うちに来る前から、という意味ですよ。やはり人間生まれ育った環境が何より大切といいますか、わかりますでしょ？」

立花「私にはよくはわかりませんが、それを導くのが、神様とかって奴の仕事じゃないんですかねぇ。」
川村「ははは、面白い、いやー、面白い。」
立花「・・・？」
川村「ははは、実に面白いですね・・・山之内もそんなことを言っていたことがありましたよ。不思議ですねえ。やっぱり警察とか自衛隊とか、そういう場所にいらっしゃる方は、そういう考え方に侵されてしまうものなんですかねぇ。」
立花「そういう考え方って何ですかね？」
川村「なんて言いますか、強権的で、自分の考えを押し付けるような。」
立花「山之内、なんて言ってたんですか？」
川村「え？」
立花「先生に？」
川村「え、ああ。あれは、春闘の頃ですかね。デモに行くために授業をボイコットした時のことだったと思います。」
立花「先生がボイコットですか？」
川村「おかしいですか？我々労働者には集会に参加する権利がある！こう見えても日教組の組合員です。」
立花「ほー、なるほどなるほど。」
川村「(♪『インターナショナル』を歌う)」
立花「で、で、その時山之内が・・・。」
川村「私が教室を出て、デモに向かおうとしたその時です。」

明かりが変わる。
先生を中心に、進藤、真。

川村「いいかい、諸君、今の中国は素晴らしいよ。中国は新しい国に生まれ変わったんだ。先日訪中を果たした共和党党首赤巌委員長も仰っているじゃあないか。反封建、反資本主義、反帝国主義、自然との闘争に打ち勝ち、揚子江、黄河に大きなダムを築き、工業的発展も素晴らしい。土地の集団所有、集団共同労働、次の社会に踏み出していく新たな一歩を見ることができる。と。」

進藤、熱烈な拍手。

真　「でも、中国には自由がなく、反対する人が弾圧されることもあるらしいと聞きました。」
川村　「おやおやそれは誰にだい。」
真　「父にです。」
川村　「山之内君だっけ。君のお父様は確か、」
真　「自衛官です。」
川村　「なるほどねぇ、そうかそうか。君のその考えが間違った方向に行ってしまうのも無理もない。」
真　「どういう意味ですか？父の職業の何が悪いんですか。」
進藤　「自衛隊は、日本を戦争に引き戻そうとしているんですよね、先生。」
川村　「進藤君、君はなんと、物事の真意を見抜く力を持っているのだ。素晴らしい。」
進藤　「先生。」
川村　「とにかく、中国のような共産主義の国にも、自由はあるんです。赤巌委員長もそう仰っている。」
真　「赤巌委員長の共和党は、戦争中は軍隊が悪いとか、天皇が悪いとか一言も言ってなかったじゃないですか。それなのに、戦争が終わったとたん、その頃のことを忘れたように自衛隊や国を攻撃しようとしている、そんなのおかしいじゃないですか！」
進藤　「（小声で）やだわ、山之内さんたらすっかり傾いちゃって。」
川村　「進藤君、山之内君には罪はないよ。きっとおうちで間違った教育をされているんだ。かわいそうにねぇ。」

周囲からくすくす笑い。

真　「私が間違っているんですか。」
川村　「そうだとも」
真　「この学校はキリスト教を教えているんですよね？もし、私が間違えているんだったら、それを正すのも神様じゃないんですか！」

一瞬、階段前の聖が浮かぶ。

聖　「違うよ。神様は裁くだけだ。」
真　「兄さん・・・。」

明かりが戻る。

川村　「日本には今新たな風が巻き起ころうとしているんだ。反封建、反資本主義の新世界が来ようとしている。」
真　「新世界・・・。」
川村　「そして、その新しい国の王となるのは、共和党赤巌委員長であると先生は考えている。」
真　「新世界の王・・・。」
川村　「(♪『インターナショナル』のサビの部分を歌う)」

明かりが戻る。
取調室。

立花　「山之内は先生に反抗的だったと。」
川村　「はい。残念ながら。」
立花　「だから、こんなことしでかしてもしょうがないと、そう仰るんですか？」
川村　「いやいやいや、そんなことはない。それとこれとは話は別です。反抗的ではありましたが山之内がこんなことをしでかすなんて、それには心底驚いています。」

短い沈黙。

川村　「山之内は、なんでこんなことしたんですかね？」

明かりが変わる。
加藤、進藤、真。

加藤　「さ、そろそろ行こうか。」
進藤　「はい。」

進藤、歩き出そうとして。

進藤　「あの、またね。」

真　「うん。」

進藤、行きかけて足を止める。

進藤　「あのさ、一つだけ聞いていい・・・。」

真　「なに？」

進藤　「なんで、こんなことしたの？」

真　「・・・。」

進藤　「ねえ、なんで・・・。」

真　「・・・。」

沈黙。

加藤　「さ、そろそろ行くよ。先生も待ってるだろうから。」

加藤、進藤、連れ立って出て行く。

真、自分の手のひらをじっと見ている。

【五の序】

真だけが心細げな明かりに照らされている。

真　「憐れみ深い父なる神よ。私たちはしてはならないことをし、しなければならないことをせず、想いと、言葉と、行いによって、多くの罪を犯しています。どうか罪深い私たちをお赦しください。」

暗闇の中から声がする。

聖の声「神は裁くだけだ。」

真　「ねえ、兄さん、ロンギヌスはなぜ槍でイエス様を刺したの？」

父の声「さてユダヤ人たちは、その日が準備の日であったので、安息日に死体を十字架の上に残しておくまいと、ピラトに願って、足を折った上で、死体を取りおろすことにした」

真　「父さん、どうして自衛隊に入ったの？」

母の声「そこで兵卒らがきて、イエスと一緒に十字架につけられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。」

真　「母さん、神様は、私たちを赦してはくれないの？」

聖の声「しかし、彼らがイエスのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。」

真　「じゃあ、いったい誰が私たちを赦してくれるの！」

聖が階段に腰かけている。膝の上には古ぼけた祈祷書。
聖の声と共に明かりがゆっくりと入ってくる。

聖　「憐れみ深い父なる神よ。私たちはしてはならないことをし、しなければならないことをせず、想いと、言葉と、行いによって、多くの罪を犯しています。どうか罪深い私たちをお赦しください。」

真が聖に近づく。

聖　「新しい命に歩み、み心に従い、み栄を表すことができますように、」

真・聖「救い主イエス・キリストによってお願い致します。アーメン。」

聖　「ようやく起きたの？お寝坊さん。」

真　「おはよう、兄さん。」

聖　「おはよう。またお祈りさぼるつもりだな。」

真　「いいじゃない、双子なんだから。兄さんがしてくれてたことは私がしたも同然よ。」

聖　「調子いいんだから。」

真　「へへへ。」

真、聖の顔を覗き込み、

真「顔色、悪いね。眠れてないの？」
聖「なんだか横になると目が冴えちゃって。」
真「起こしてくれたらよかったのに。」
聖「そんなこと言って。起こしても起きないんだろ。」

二人、笑いあう。
丸椅子から母が立ち上がり、テーブルに近づき、椅子に座る。

母「真、ご飯できたよ。」
真「はーい。ほら、兄さん行こ。」
聖「わかったわかった。」

真、聖に手を差し伸べようとする。聖も手を伸ばす。その手に白い包帯。

真「まだ痛い？」
聖「痛みはないよ。」
真「ごめんなさい、私のせいで。」
聖「真のせいじゃないさ。」
真「でも・・・。」
聖「ほら、早く行かないと父さんに怒られるよ。」
真「・・・うん。」

二人、テーブルに近づこうとするが、聖の足が止まる。

真「兄さん？」
聖「・・・。」
真「どうしたの？兄さん。」
聖「・・・。」
真「兄さん？」

階段に蹲（うずくま）る聖。
抱きかかえるように、そのそばに跪（ひざまず）く真。

真　「母さん、母さん！」
母　「なに、どうしたの？」
真　「兄さんの様子がおかしいの。呼んでも、返事しないの。」
母　「聖、どうしたの、聖。」
真　「兄さん、返事して兄さん。」
母　「大変、痙攣を起こしてる。真、父さんを早く！聖、しっかりしなさい、聖！」
父　「どうしたんだ、一体。」
母　「あなた、聖が。」
父　「こりゃ大変だ。」
母　「とにかくお医者さまを。」
父　「わかった。」
真　「母さん、兄さんは。」
母　「ああ、なんでこんなことに。」
真　「兄さん、兄さん。」
父　「真、こっちに来なさい。」
母　「聖、しっかりして、聖！」

聖の名を呼ぶ母の声を残し、二人の姿が影にのまれる。

父、真を連れて、テーブルの方へ。
椅子に座らせ、自分は走り去る。
不安げな真の姿を残して周囲は暗くなる。

【五】

加藤が颯爽とスモモの乗った皿を片手に現れる。

加藤　「食べて。」
真　「・・・。」

真、加藤と皿を不思議そうに見比べる。

加藤　「どうしたの、食べて。」
真　「・・・ありがとうございます。」
加藤　「ちゃんと、皮剝いて、それと、ほら、お塩も乗っけておいたから。」
真　「あ、ああ。」
加藤　「せっかくの差し入れだから。さ、遠慮しないで。」

真、一口食べる。が、顔をしかめる。

加藤　「どう？」
真　「酸っぱい。」
加藤　「お塩、つけても？」
真　「酸っぱい。」
加藤　「え、本当に」

と、食べてみる。

加藤　「本当だ。酸っぱい。」

立花、入ってくる。

立花　「お、差し入れか。」
加藤　「あ、立花さんも食べてみます？」
立花　「スモモか。誰が剥いたんだ。」

加藤　「自分です。こうして食べるの好きだって言ってたから。ね。」
真　「はい。」
立花　「ほー、お前がねぇ、なかなか器用じゃねえか。」
加藤　「こう見えても自炊は得意です。
進藤さんが持ってきてくれたんだよね。」
真　「はい。」
加藤　「昔、お兄さんと一緒に食べたって言ってたもんね。」
真　「・・・はい。」

真、スモモを口に運ぶ。
立花、そんな真を少し見ている。

立花　「・・・ぼちぼち始めるか。」
加藤　「はい。」
真　「ごちそうさまでした。」
加藤　「よかったら、また剥いてあげるよ。」
真　「ありがとうございます。」

加藤、少し嬉しそうに皿を片づける。

立花　「スモモ、美味かったか。」
真　「はい。」
立花　「兄さんと食べたって？」
真　「はい。昔、庭にスモモの木があって・・・。」
立花　「その兄さんの話、聞かせてもらおうか。」
真　「・・・。」
立花　「双子だったんだってな。仲良かったって？似てたか？」
真　「・・・。」
立花　「どうした？」
真　「話したくありません。」
立花　「なんでだ。」
真　「関係ないからです。」

立花　「それは、こっちが決めることだ。」
真　「なんでですか？」
立花　「なんでって、なんだよ。」
真　「関係ないって言ってるじゃないですか！」
立花　「それは、こっちが決めることだって言ってるだろ！」
真　「・・・。」
加藤　「あー、僕たちは、今回の事件に至った一連の経緯を調べなきゃいけないんだよ。どうして、こんなことしたのかとか、君が何をしたかったのかとか。」
真　「何をしたかったのか・・・。」
加藤　「そう。」

真、立花を睨み付ける。

真　「じゃあ、あなたは？」
立花　「なんだよ。」
真　「じゃあ、あなたは何がしたいんですか？」
立花　「なに？」
真　「私は、あの場で取り押さえられてここにいます。現行犯逮捕でしたっけ？逃げようとも隠れようとも思いません。ご質問には何でもお答えします。でも、それが何になるんですか？」
加藤　「だからぁ、僕たちはいろいろ調べなくちゃいけないんだよ。動機とかここに至った経緯とかね。」
真　「何のために？」
加藤　「何のためって、それは、」
立花　「裁くためだ。」
真　「裁くため・・・。」
立花　「そうだ、お前の罪を裁いて、刑を受けさせるためだ。」
真　「だから、あなたたちのことを刑事っていうんですね。」
加藤　「おもしろいこというね。」
立花　「ばかか、感心してどうする。」

真、初めて少し笑う。

真　「でも、それは・・・。」
立花　「なんだ？」
真　「あなたたちの仕事じゃない。」
立花　「そうだ。俺たちの仕事はお前のしでかしたことを、立件って言ってな、裁判にかけられるように調べることだ。最終的にはお前は裁判所で裁かれることになるんだ。」
真　「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出すが、それはこの人に何の罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」
立花　「なに？」
真　「ヨハネによる福音書です。小さい頃、よく兄と一緒にお芝居をして・・・。」
立花　「ゴルゴダの丘か？」
真　「よくご存じですね。」
立花　「お父さんから聞いたよ。」
真　「父が？あの人、こんなこと覚えてたんですね。」
立花　「なんだよ、意外か？」
真　「・・あの人が大事なのはいつも自分のことだけですから。」

真と父が入れ替わる。

父　「冷たい父親だと思っていらっしゃいますよね。」
立花　「さあ、どうですかね。」
父　「・・・事件があってから、毎日、職場に電話がかかってくるんです。毎日毎日そりゃあたくさんの電話が。山之内はまだ自衛官をやってるのか、なんで責任取らせて辞めさせないんだって、そりゃあ、たくさんの電話が。毎日針のむしろですよ。たまったもんじゃない。」
立花　「お察しします。」
父　「結局、日本は何にも変わっていない。戦争に負けて、資本主義の新しい世の中になったって言ったって、気持ちの中は旧体制の村社会のまんまです。何も変わりゃしない。」
立花　「仰るとおりかもしれません。」
父　「・・自分がいい父親だったとは、一度も思ったことはありません。いい父親であろうなんて思ったこともないかもしれない。あの子は、真は、今でも、箪笥の上に飾

ってあった、軍服を着た写真の私を、父親だと思ってるかもしれない。でも、それでもいいんです。これが私のやり方なんです。自由主義、個人主義のぐらつかない自分であること、それが親として、あの子たちにしてあげられる唯一のことだと、私は信じています。」

立花　「・・・。」

父　「だから、私は、絶対に自衛隊を辞めません。どんな非難を浴びようと、石持て追われようともあそこに居続ける。それが私の、親としての責任の取り方です。」

立花　「・・・。」

父　「いけませんか？」

立花　「それを決めるのは俺たちじゃない。」

長い沈黙。

父　「・・・そうか、そうですよね。」

短い沈黙。

立花　「あの子と双子の息子さんがいたんでしたよね。」

父　「ええ。・・・他界して三年になります。」

立花　「お伺いしても？」

父　「・・・一本、いただけますか？」

父、煙草を指す。

立花、煙草を差し出す。

立花　「どうぞ。」

父、一本深く吸い込み、

父　「やめてたんですけどね。」

立花　「奥さんには、内緒にしておきますよ。」

父　「・・・どうも。」

二人、一服する間。

父　「聖が亡くなったときの話は誰にもしたことはありません。」
立花　「ご家族では？」
父　「禁句のようになっていました。・・・正直、辛すぎてね。」
立花　「そうですか。」

短い沈黙。

父　「私のせいなんです。聖が死んだのは。」
立花　「え？」
父　「私のせいなんです。」

明かりが変わり、テーブルの周りに母、真、聖、やってくる。
聖の手からは出血。手には包帯が巻かれている。

母　「なんでこんなことになったの。ああ、もうこんなに血が出て。」
真　「ごめんなさい。」
聖　「真のせいじゃないって。」
真　「でも。」
母　「まだ止まらないわ。やっぱりちゃんとお医者様に診てもらった方が良くない？」
聖　「大丈夫だって。指だってほら、ちゃんと動くし。ね、父さん。」
父　「そうだそうだ。なんだなんだ、このくらいで大騒ぎして。大体、母さんは大袈裟なんだよ。ちゃんと消毒したんだから、血なんかすぐに止まるさ。」
聖　「ほら、もうだいぶいいよ。ありがとう、母さん。」
母　「そう？でも、やっぱり心配だから、お医者様に。」
聖　「大丈夫。父さんもいっつも言ってるじゃないか。傷は男の勲章。そうでしょ、父さん。」

父、乱暴に聖の頭を撫でる。

真　「本当に、大丈夫？兄さん。」
聖　「大丈夫。真の方こそ、怪我はない？」
真　「うん。」
聖　「それならよかった。」
父　「しかしすごいなぁ。お前たち、あの角の魚屋の長介に喧嘩売ったなんてなぁ。」
母　「感心してる場合ですか。後でお詫びしなくちゃ。」
真　「なんでよ。悪いのはあっちなのに！」
父　「そうだ、怪我したの聖の方だぞ。」
母　「あなた。」
父　「なんで喧嘩になったんだ。え？」
真　「それは・・・。」

二人、顔を見合わせる。

母　「またからかわれたのよね。」
真　「母さん、知ってたの？」
母　「知らないわけないじゃない。母さんだって、あのうちに魚買いに行く度、イヤミ言われてるんだから。」
父　「何の話だそれは？」
母　「知らないのは、あなただけですよ。魚屋の長介さん、最近マルクスだか何だかに凝りだしちゃって、やれ、安保がどうだとか、自衛隊は違憲だとか、もううるさいのなんのって。」
父　「あんな魚類が進化したようなやつがか。」
聖　「僕ら、学校行く度にあそこの前通るだろ。そのたびにバカにするんだよ。今日も税金で学校行くのかとか。税金泥棒とか。」
父　「道、変えればよかったじゃないか。」
真　「そんなことしたら私たちの負けになっちゃうじゃない。そんなの絶対に嫌だもん。」
父　「それで長介に食ってかかったのか。」
真　「だって悔しかったんだもん。」
父　「バカだなぁ。二人がかりだって、相手は大人だ。勝てるわけない。で、どうしたんだ、その傷は。」

真、ポケットの中の何かを握りしめる。
真が何かを言おうとした瞬間、聖が口を開く。

聖「転んだ拍子に切ったんだ。」
真「兄さん。」
父「それにしては随分すっぱり切ったもんだ。運が悪かったな。」
聖「僕の日頃の行いが悪いんだな。ざまぁないや。」

父、聖の頭をまたくしゃっと撫でて、椅子に戻る。
母、少し笑って救急箱を片づけ去る。

真「ごめんなさい。兄さん、私が護身用だなんてこんなナイフ持ってたばっかりに。」
聖「喧嘩して取っ組み合いの最中に、刃物なんて見つかってごらんよ。後で何言われるかわからないだろ。とにかく、怪我したのが、僕でよかったよ。」
真「本当にごめんね。」
聖「本当にそう思ってる？」
真「思ってる。」
聖「何でもする？」
真「何でもする。」
聖「じゃあ、包帯がとれるまで真は僕の言うこと何でも聞くんだね。」
真「ずるい、今の取り消し！」

二人の時間が凍りつく。

父「大したことはないんだろうと家族全員が思っていました。聖も特に痛がってる風は無くて。でも、それがいけなかったんですね。破傷風でした。突然痙攣を起こして・・・。本当にあっという間でした。」

聖、崩れ落ちる。

真「母さん、母さん！」
母「なに、どうしたの？」

真　「兄さんの様子がおかしいの。呼んでも、返事しないの。」
聖　「憐れみ深い父なる神よ。」
母　「聖、どうしたの、聖。」
真　「兄さん、返事して兄さん。」
聖　「私たちはしてはならないことをし、しなければならないことをせず」
母　「大変、痙攣を起こしてる。真、父さんを早く！聖、しっかりしなさい、聖！」
父　「どうしたんだ、一体。」
母　「あなた、聖が。」
聖　「想いと、言葉と、行いによって、多くの罪を犯しています。」
父　「こりゃ大変だ。」
母　「とにかくお医者さまを。」
父　「わかった。」
聖　「どうか罪深い私たちをお赦しください。」

証人席から、皆が立ち上がり、葬列のように、聖をテーブルの上に横たえる。

真　「母さん、兄さんは。」
母　「ああ、なんでこんなことに。」
真　「兄さん、兄さん。」
父　「真、こっちに来なさい。」

父と、真を残し、人々は去る。
テーブルの上には、白布をかけられた聖。
白布からは、包帯の巻かれた手だけが、力なくはみ出している。

真　「父さん、兄さんは？」
父　「聖は、死んでしまった。」
真　「兄さんが死んだ？嘘でしょ。」
父　「嘘じゃない。真。」
真　「嘘。だって、さっきまでここに、笑って、ここにいたのに。」

父、ただ、真を見つめている。

真　「兄さん、私なんでも言うこと聞くよ。」

沈黙。

真　「さてユダヤ人たちは、その日が準備の日であったので、安息日に死体を十字架の上に残しておくまいと、ピラトに願って、足を折った上で、死体を取りおろすことにした。そこで兵卒らがきて、イエスと一緒に十字架につけられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。」

真、ゆっくりとテーブルの周りを歩き出す。

真　「しかし、彼らがイエスのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。」

真、ポケットからジャックナイフを取り出す。

真　「しかし、ひとりの兵卒が槍でその脇を突き刺すと、すぐ血と水とが流れ出た。」

真、ゆっくりとナイフを聖の身体に向ける。

父　「真！」

真　「どうして、止めるの。」

父　「なんでそんなことを。」

真　「証を立てなくちゃ。兄さん、帰ってこられないでしょ？」

父　「聖は死んでるんだぞ。」

真　「兄さん、ロンギヌスの槍よ。新世界の王になるって言ってたじゃない！」

真、ただ、聖を見つめている。

立花が戻ってくる。

父　「思えばあの時から、真の中で何かが壊れてしまったんだと思います。」

【六】

母と加藤。

加藤　「落ち着きました？」
母　「はい。」
加藤　「じゃあ、そろそろ戻りましょうか。」
母　「あの、もう少し・・・。」
加藤　「え？」
母　「いけませんか？」
加藤　「・・・わかりました。」
母　「馬鹿な母親だと、お思いですわね。」
加藤　「いや、そんなことは。」
母　「まさか、こんなことをするなんて・・・。
最近、あの子が何を考えているのか、私、正直わからないんです・・・。」

沈黙。

加藤　「親なんて、そんなもんじゃないですか？」
母　「え？」
加藤　「あ、変な言い方しましたよね。すみません。自分も、あのくらいの歳のときは、親とあんまり口きかなかったなと思って。」
母　「そうですか。」
加藤　「今になってみると、もっと大事にしておけばよかったとか、ね・・・。」
母　「え？」
加藤　「あ、亡くなったんです、うちの母親。空襲で。」
母　「ああ。」
加藤　「孝行したいときに親は無しってね、上手いこと言いますよね、本当。」

加藤、笑おうとするが、その笑いは形にならない。
沈黙。

母　「私、あの子に捨てられたんです。」
加藤　「真さんに？」
母　「ええ、多分・・・。」

沈黙。

加藤　「お話、お伺いできますか？」
母　「・・・はい。
聖が亡くなってしばらくの間のことは、正直あまり覚えていません。頭の中にぼーっと霧がかかったようで・・・。一番しっかりしていたのは真でした。」
加藤　「すぐに学校にも行くようになったと仰ってましたよね。」
母　「ええ。でも、それがいけなかったのかもしれません。」
加藤　「とおっしゃいますと？」
母　「真がまた学校に行くようになって、私たちも少し落ち着き始めた頃でした。一度だけ、聞かれたことがあります。兄さんはなんで死んだの？って。」
加藤　「何て、お答えになったんですか？」

真、現れて母を見つめる。

真　「ねえ、母さん、兄さんはなんで死んだの？」
母　「・・・。」
真　「ねえ、なんで死んだの？どうして死んだままなの？どうして、イエス様みたいに復活してこないの？」
母　「真、そんなこと、考えるものじゃないわ。私たちにわかるわけがないじゃない。神様のお決めになったことだもの。」
真　「神様がお決めになったの？じゃあ、兄さんは死ぬべくして死んだっていうの？母さんは、こうなってもしょうがなかったっていうの？」
母　「そうよ。すべては神様のご意志だもの。きっとこれには意味があるのよ。」
真　「意味がある・・・？」
母　「そうよ。神様は、越えられない試練はお与えにはならないから。」
真　「試練・・・。」
母　「今はどんなにつらくても、神様のご意志を疑ってはいけない、受け止めなければ。」

真　「じゃあどうしてあれから、母さんも父さんも私のことちゃんと見ないの？」
母　「そんなことない。」
真　「うそ。」
母　「真、落ち着いて。ね。お願いだから。
天国に行った聖のために、一緒に祈りましょう、ね。」

真、持っていた祈祷書を床に叩きつける。

母　「真！」

真、母を強く見つめ、その後出て行く。

母　「それ以来、真は、私の目を見てくれなくなりました・・・。」

沈黙。

加藤　「それで真さんに捨てられたと？」
母　「いいえ。あれはきっと一時のことだったんです。真はショックで受け止められなくて、それであんな罰当たりなこと言っただけなんです。間違っても堕落するような子じゃない。真は堕落させられてしまったんです！あの白瀬とかいう男に！」
加藤　「何があったんですか？」
母　「真は、学校に行っても授業にも出ずに、ふらふらしていることが多くなったようでした。それで、転校させることになったんです。ミッションスクールの」
加藤　「確か、栄光学園。」
母　「そうです。厳格な女子高で・・・。私は、神様があの子を救ってくれると信じてました。でも・・・。」
加藤　「うまくいかなかったんですね。」
母　「しばらくはおとなしく通っていたんです。でも、段々とまた通わなくなって。家に閉じこもりがちになっていきました。学校に行かないのはもうしょうがない。私たちも、そう諦めかけていた時でした。久しぶりにあの子が新宿に本を買いに出かけると言って。気持ちのいい晴れた午後でした。一緒に行こうかと言うと、笑って、一人で歩きたいからと言ったんです。あの時ついて行けばおかしな道に踏み込む

こともなかったのかもしれないのに・・・。」

加藤「何があったんですか？」

母「出会ってしまったんです。あの男に。白瀬采女に。」

影のような群衆が集まってくる。

その中に真。

テーブルの上に白瀬。

白瀬「いいですか？ソ連、中共は、日本を赤化しようとしているのですよ。彼らの思想は、共和党、労働組合、全学連、母親大会といった形でも存在している。」

真「兄さん・・・？」

白瀬の演説の途中で、群衆の中に聖を見つける真。

近づこうとするが、なかなか近づけない。

白瀬「彼らは、ソ連、中共と同列ですぞ！彼らは、平和については語るが、自由については口を閉ざす。それは、彼らの国に自由がないからです。」

演説の音がだんだんと聞こえなくなり群衆のヤジや怒号に消されそうになる。

聖「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出すが、それはこの人に何の罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである。」

真「罪を見いだせないなら、なぜ、裁かれなければならないの？私たちが乗り越えなければならない試練て何？ねえ、兄さん！」

母「十字架につけよ、十字架につけよ」

川村「いいかい、諸君、今の中国は素晴らしいよ。反封建、反資本主義、反帝国主義。次の社会に踏み出していく新たな一歩を見ることができる。」

白瀬「資本主義を倒すのは悪いことではない。むしろ、良いことかもしれない。しかし、彼らのやり方で倒してはいけないのです。日本には日本のやり方があるんです！」

聖「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼には何の罪も見いだせない」。

川村「山之内君だっけ。君のお父様は確か、」

進藤　「自衛官でーす！」
川村　「なるほどねぇ、そうかそうか。君のその考えが間違った方向に行ってしまうのも無理もない。」
父　「十字架につけよ、十字架につけよ。」

聖がゆっくりと振り返る。
白瀬、その他の人々が凍りつき、音が消える。

聖　「ねえ、真、ロンギヌスの槍って知ってる？」
真　「ロンギヌス？」
聖　『ひとりの兵卒が槍でその脇を突き刺すと、すぐ血と水とが流れ出た。』この兵卒の名前がロンギヌス。その時イエス様を刺したのがロンギヌスの槍っていうんだよ。」
真　「へえ。この人、名前あったんだ。」
聖　「この槍には伝説があるんだけどね。知りたくない？」
真　「知りたい。」
聖　「この槍を手に入れたものは、新世界の王になれるっていうんだ。」
真　「新世界の王？」
聖　「だから、ヒットラーとかも皆手に入れようとしたんだって。」
真　「すごいね。新世界の王か。」
聖　「なんだかわくわくするだろ？」

周囲の音、再び戻る。
真、また聖の姿を見失う。

川村　「日本には今新たな風が巻き起ころうとしているんだ。反封建、反資本主義の新世界が来ようとしている。」
進藤　「新世界！」
川村　「そして、その新しい国の王となるのは、共和党赤巌委員長であると先生は考えている。」
進藤　「新世界の王！」
真　「赤巌委員長の共和党は、戦争が終わったとたん、自衛隊や国を攻撃しようとしている、そんなのおかしいじゃないですか！」

進藤　「（小声で）やだわ、山之内さんたらすっかり傾いちゃって。」
川村　「進藤君、山之内君には罪はないよ。きっとおうちで間違った教育をされているんだ。かわいそうにねぇ。」

周囲からくすくす笑い。

真　「私が間違っているんですか。」
川村　「そうだとも」
真　「もし、私が間違えているんだったら、それを正すのも神様じゃないんですか！」
聖　「違うよ。神様は裁くだけだ。」
真　「兄さん・・・。」
白瀬　「にもかかわらず、彼らは大衆をデモやストライキに駆り立てようとする。法を無視し、集団暴力をふるっているのに、警察は取り締まることさえできない。マスコミは彼らに洗脳され、政府は私利私欲に走っている。」
真　「なんでロンギヌスは、もう死んじゃってるイエス様を槍で刺してみたんだろ。」
聖　「それはきっと確かめたかったのさ。」
真　「確かめたかった？」
聖　「誰が正しいのか、誰が本当の新世界の王なのか！」
白瀬　「皆さん、この日本をどうするんですか！」

白瀬の姿と聖の姿が重なる。
憑かれたように白瀬に手を伸ばす真。

母　「あの日、遅く帰った真は、なんだか心ここにあらずといった感じでした。それから二日くらいたった日のことでした。」

真、入ってくる。

真　「母さん。」
母　「なあに。」
真　「私ね、家を出ることにする。」
母　「え？何言ってるの？」

真　「家を出たいの。愛心党に入りたい。」
母　「愛心党？何、それ？」
真　「私、愛心党に入って、国を守るための運動をしたいの。」
母　「ちょっ、ちょっと待って。母さん、全然ついていけない。」
真　「きっとわかってもらえないと思うけど、私、もう決めたから。」

真、出て行く。

母　「いつもは私を気遣って、自分を押し通したことなんかなかったあの子が・・・初めてでした。私、どうしたらいいかわからなくて・・・。あの時、きちんと止めていればこんなことにはならなかったと思うと、悔やんでも悔やみきれなくて・・・。」

母、うつむいてしまう。
加藤、その姿に言葉もない。

【七】

加藤、一人で取調室で資料を捲っている。
立花、入ってこようとして、それに気づき、暫く見ているが、

立花　「随分、熱心じゃねぇか。」
加藤　「立花さん、やだな、いつからそこに？」
立花　「お前こそ、何時からいるんだよ。え？」
加藤　「いいじゃないですか、そんなこと。」
立花　「また泊まったのか。」
加藤　「自分はチョンガーですから、気楽なもんです。」
立花　「そういう問題じゃねぇよ。大体着替えてんのか、それ。」
加藤　「え、臭います？」
立花　「あー、ヤダヤダ、そんなんだからいつまでたっても嫁が来ねぇんだよ。」

加藤　「余計なお世話ですって。それより、立花さん、山之内の件なんですけど、やっぱり、俺、裏で誰か糸引いてると思うんですよ。」
立花　「そうかあ？」
加藤　「お母さんだって言ってたじゃないですか。白瀬の影響、随分受けてたって。絶対あの男ですよ。間違いありませんて。」
立花　「白瀬が教唆ねぇ。その線は薄いと思うがねぇ。」
加藤　「あの子が理由もなくこんなことしでかすなんて、信じられないんですよ。だって、立花さん、感じません？普通の女の子ですよ。この前だって、普通に友達と話して、普通に少し笑って、普通にスモモ食べて。その子が、自分一人で計画して、厳重警備の日比谷公会堂の公衆の面前で、人ひとり刺し殺せます？自分には到底信じられません！」
立花　「・・・。」
加藤　「自分は、あの時、確かに山之内を取り押さえました。凶器を素手で掴んだことに気が付かないくらい必死で。その自分に、山之内は本当に心配そうに、指は大丈夫かって聞いたんです。意味が分かりませんよ・・・。」
立花　「・・あんまり、突っ込みすぎんなよ。辛くなるだけだぞ。」
加藤　「・・・わかってます。とにかく、白瀬の線、もう少し追わせてください。お願いします。」

加藤、頭を下げる。

立花　「わかった。」
加藤　「ありがとうございます。白瀬、連れてきます。」
立花　「いや、白瀬の狸野郎は後回しにして、あの人に来てもらうとしよう。ただ、言っとくけどなぁ、一筋縄じゃあ行かねぇぜ。」
加藤　「あの人って？」
立花　「白瀬彌生。」

白瀬彌生、入ってくる。

立花　「悪いねぇ。わざわざお呼び立てしちまって。」
彌生　「お久しぶりですねぇ、立花さん。」

立花「掃き溜めに鶴とはこのことだねぇ。相変わらず元気そうじゃねぇか。会いたかったぜぇ。」
彌生「そんな安っぽいお世辞、嬉しかないですよ。で、今日は何の御用ですか？白瀬のことでしたら、お気遣いなく。どうぞ、好きなだけ、お調べくださいな。」
立花「おいおい、口ではそんなこと言って、本当は寂しくってしょうがねぇんじゃねぇかい？」
彌生「まさか。そんな時期、とっくに終わってますよ。」
加藤「山之内真、ご存知ですよね。」
彌生「あら、この人は？」
立花「あー、初めてか。今年、うちに配属になってな。」
加藤「加藤巡査部長であります。」
彌生「あらあら、随分、初々しいこと。」
立花「もういい歳なんだがね、どうも嘴が黄色いまんまでな。なかなか手ぇ焼かされるよ。」
加藤「立花さーん、そりゃないですよぉ。」
彌生「で、真ちゃんのことで何か？亡くなった赤巌さんとは、敵陣でしたけども、何かとご縁があってねえ。ですから、こんなことになって、とても残念に思ってるんですよ。あんなかわいい子が、こんなことしでかすなんてねぇ。」
立花「愛心党は女房でもってるってなぁ。知らねぇ奴はいねぇぜ。」
彌生「ご冗談を。」
立花「泣く子も黙る彌生姐さんがついてるってのに、らしくねぇじゃねぇか、とんだ騒動に巻き込まれちまったよなぁ。」
彌生「本当に。散々反対したんですけどねぇ。火の粉ってもんは、どんなに振り払おうとしたって、降りかかるときには降りかかっちまうもんなんですかねぇ。」
加藤「山之内真、愛心党の構成員でしたよね。」
彌生「とっくに除籍してますよ。」
立花「厄介払いかい？」
彌生「そんなことするわけないじゃないですか。世間様からはどう見えてるかわかりませんけどね、愛心党の党員は家族同然ですよ。生半可な覚悟で預かってるわけじゃない。あの子の時なんか、そりゃあもう大変だったんですから。親御さんまで乗り込んできちまうし。」
加藤「ああ、確かにあのお母さんならやりそうですね。」
彌生「いいえ、お父様もですよ。」

立花　「あの父親も？」
彌生　「あんなことさえなけりゃ、うまく言い含めて、お家に帰しちまったんですけどね。」

明かりが変わる。
テーブルに父、母、白瀬、彌生。

母　「お時間取らせてすみません。今日は折り入ってお願いがありまして。」
白瀬　「何ですかな。」
母　「先日からこちらにお世話になっている娘に、家に戻るように説得してはいただけないでしょうか。」
彌生　「ご両親の許可をいただいたと、真ちゃん、言ってましたけどねぇ。」
母　「それは、あの・・・。」
父　「私が許可しました。」
母　「あなた！」
父　「本当のことだろう。隠したってしょうがない。」
白瀬　「山之内さん、ではなぜ真ちゃんを返せと仰るんですかな？」
父　「私は自由主義者でしてね。未成年だからどうの、右翼だからどうのと、そんなことでつまらん反対はしないつもりです。真にも自分が正しいと思ったことはやればいいとこう言ってやりました。」
母　「あなた・・・。」
彌生　「随分進んだ考え方のお父様だこと、ねぇ、あなた。」
白瀬　「そうだな、素晴らしい。」
父　「こういう運動をするなら、親に面倒を見てもらうという考えは捨てろ。やるんだったら自分で独立してやれ。そう言ってやりましたよ。」
彌生　「それで真ちゃん、荷物抱えてうちに来たのね。」
母　「とんだご迷惑おかけしまして。」
白瀬　「で、その御父上がなぜご意見を変えられたのですか。」
父　「妻が煩く言うんですよ。十七歳の女の子が政治活動に入るなんて、世間的に考えても大いにおかしい。せめて高校くらい出てからでもいいんじゃないかと。」
彌生　「お母さまの仰ることもよくわかりますわ。うちには他にも党員が一緒に生活してますから、女手が増えて助かることもあるんですけどね。でも、年頃の女の子でしょ。何かと、ねぇ。」

母　「そうですわよね、やっぱり、ご迷惑だわ。真を連れて帰りましょ。ね、あなた。」
父　「そうだな。仕方ない。そうするか。」
白瀬　「ちょっとお待ちください。お父さん、自由主義だと仰って真ちゃんを放り出しておいて今更家に帰れ、学校へ行けというのは、少々都合が良すぎやしませんか。」
父　「はい？」
白瀬　「私も高校まで出ておかないと将来困るから学校に帰るように何回も真ちゃんに勧めてみました。でも、真ちゃんの意志は非常に固いんです。お父さん、お母さん、真ちゃんがどうしてもここに残りたいと言っている今、どうでしょう。一つ、私に預けていただけませんか？真ちゃんは私が、自分の娘のつもりで、一人前にして見せますよ。」
彌生　「あなた、そんな思いつきで・・・」
白瀬　「いや、違うんだ。あの日真ちゃんに初めて会った時からずっと考えていたことなんだ。」
彌生　「そんな、それなら私に一言相談してくれてもいいじゃありませんか？」
白瀬　「そんなことしたら、反対するでしょうが。」
彌生　「そんな、私がいつ」
白瀬　「とにかく！真ちゃんが家に来たからと言って、無理に煽動して身を誤らせるようなことは絶対しません。そういう時は、私たち夫婦も死ぬ時です。」
彌生　「ちょっと！」
母　「そんな・・・。」
白瀬　「この白瀬采女、人様のお子さんだけを死地に陥れるようなことは、絶対に致しません！」
父　「そういうことでしたら。」
母　「あなた、何を言ってるんです！」
父　「お任せ致します。」

父、驚いている母を後目に、深々とお辞儀。

父　「どうもお邪魔しました。」
母　「え、ちょっとあなた。」
父　「帰るぞ、さ、ほら。」
母　「でも・・・。」

父、母を連れて出て行く。
残った白瀬、彌生。白瀬は、彌生を伺うが、彌生はまっすぐ前を向いたまま。

白瀬「あの、彌生ちゃん・・・。」
彌生「初めて真ちゃんに会った時から決めてた。そうですかそうですか、私にひとっことも相談もなく、ねぇ？」
白瀬「わかるだろ。あの子家にも学校にも居場所がないんだよ。このままじゃ必ず道を誤る。彌生ちゃんならわかるだろ。」
彌生「全く、大概にしてくださいよ。うちは慈善事業やってるわけじゃないんですから。猫の子拾ってくるみたいに、居場所のない子供引き受けちまったら、たまったもんじゃありませんよ。」
白瀬「そんなんじゃない、そんなんじゃないんだ。うちに来た時のあの子の目、見ただろ？覚えてるだろ？」
彌生「美しかった・・・ですか。いやだいやだ、鼻の下伸ばしちまって。」
白瀬「やだなぁ彌生ちゃん、そんなんじゃないよ。あの美しさは、とても危うい。あのままじゃ、あの子は身を亡ぼす。だから」
彌生「だから誰かが正しい道に導いてあげないといけない。ですか？」
白瀬「そうだ。」
彌生「本当お人よしなんですから。」

白瀬、彌生の肩を優しく叩いて、出て行く。
明かりが変わる。取調室。

彌生「私には、子供ができなかったもんですから、白瀬は真ちゃんが来てくれて、本当に嬉しかったんでしょう。実の娘みたいに、いえ、それ以上に可愛がっていました。真ちゃんからも、段々尖ったような表情は消えて、でも、その分、危険なくらいに」
立花「運動に心酔していった。」
彌生「そうです。」
加藤「この事件を起こす前にも妨害行為で、数回補導されています。随分のめりこんでますね。」
立花「それは、白瀬の影響かい？」

彌生　「いえ、そうじゃないでしょ。」
加藤　「そんな」
彌生　「言っときますけど、責任逃れで言ってるわけじゃないですよ。」
立花　「過激に見えても、愛心党は他の団体とは違う。騒ぎはでかく、でも、俺らとドンパチするようなことはしねぇ。そうだよな。」
彌生　「党員は家族、ですからね。つまらないことでお縄にするわけにはいきませんよ。」
立花　「新聞に書かれるように運動しろ。左翼とぶつかったら警察官を利用してあまり深入りしないでいいところで引き揚げ、犠牲者を決して出すな。だろ？」

彌生、少し笑う。

立花　「手に負えなかったのか、あの子は。」
彌生　「難しいもんですねぇ。子育てっていうもんは。」
立花　「子育てか、そうだなぁ。大事にすればするほど、思うようにはいかねぇもんかもしれねぇな。」
彌生　「・・・そうかもしれませんね。」

明かりが変わり街灯演説。
テーブル上に白瀬と真。

白瀬　「いいですか？ソ連、中共は、日本を赤化しようとしているのですよ。」

周りに群衆。
群衆は声高に『インターナショナル』を歌っている。

群衆　「(♪『インターナショナル』を歌う)」

白瀬、真は、その怒号のような歌声の中に立たされている。
白瀬、いつもの演説を繰り返すが、その声は群衆の歌声にかき消される。

白瀬　「彼らの思想は、共和党、労働組合、全学連、母親大会といった形でも存在してい

る。彼らは、ソ連、中共と同列ですぞ！彼らは・・・については語るが、自由については・・・。それは、彼らの国に・・・いからです。」

不安な真。

大声で歌い続ける群衆の中に母と父を見る。

父母　「十字架につけよ！十字架につけよ！」

真　「母さん、父さん？」

その時、テーブルに聖が飛び乗ってくる。

聖　「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出すが、それはこの人に何の罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」

群衆　「十字架につけよ！十字架につけよ！」

白瀬　「資本主義を倒すのは悪いことではない。むしろ、良いことかもしれない。しかし、彼らのやり方で倒してはいけないのです。日本には日本のやり方があるんです！」

群衆　「十字架につけよ！十字架につけよ！」

父　「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」

群衆　「十字架につけよ！十字架につけよ！」

白瀬　「にもかかわらず、彼らは大衆をデモやストライキに駆り立てようとする。法を無視し、集団暴力をふるっているのに、警察は取り締まることさえできない。」

群衆　「十字架につけよ！十字架につけよ！」

聖　「あなたがたは私を十字架につけるがよい。」

白瀬　「マスコミは彼らに洗脳され、政府は私利私欲に走っている。皆さん、この日本をどうするんですか！」

真　「やめてー！！」

真、ポケットからジャックナイフを取り出し、それを掲げ、群衆にとびかかろうとして、白瀬に止められる。

聖、真を哀れみの目で見ながら群衆の中に混ざっていく。

群衆、再び嘲笑と共に『インターナショナル』を歌いながら去っていく。

群衆　「(♪『インターナショナル』のサビの部分を歌う)」

白瀬、真の手をひいてテーブルを降り、座るように促す。
真、白瀬に目で訴えるが、白瀬、真と目を合わせようとしない。

白瀬　「これで何度目だ。」
真　「・・・。」
白瀬　「あれほど危ないことはするなと言ってるだろう！それなのに、さっきのナイフは何だ、君はあれを人様に向けるつもりだったのか！」
真　「・・・。」
白瀬　「真ちゃん、どうしてわからないんだ！」
真　「先生、このままでは日本は革命の波に押しつぶされてしまいます。」
白瀬　「何度言ったらわかる。いいかい、運動は一発勝負じゃないんだ！」
真　「安保抗争は日に日に激しくなってるじゃないですか！やるなら思い切ったことをやらなければ！」
白瀬　「それで、刃を取ったのか？君はそれが正しい行為だと思っているのか！」
真　「・・・。」
白瀬　「いいかい？行為というものは実際に犯してみれば頭で考えていたこととどこか狂ってしまうものなのだ。何かあったら、親御さん、嘆くのだぞ。」
真　「・・・。」
白瀬　「なあ、真ちゃん、私は真ちゃんのこと、娘のように思っているんだ。わかるかい？」
真　「・・・はい。」
白瀬　「君のような純粋な気持ちを持った子をわざわざ汚すようなことはしたくない。危ないことだけは絶対にしないでくれ。いいね。」
真　「・・・。」
白瀬　「真ちゃん。」
真　「・・・先生は党員のみんなが影で何て言ってるか、ご存知ですか・・・？」
白瀬　「私の運動方針では左翼勢力は阻止できない。白瀬は腰砕けだ・・・か？」
真　「知っておられたのですか？」
白瀬　「もちろん。」
真　「だったらなぜ言わせておくのですか！」

白瀬　「これでも皆の親代わりのつもりだからね。親っていうのは頭ごなしに叱りつけるだけが仕事ではない。背中を見せ、進むべき道を示すのも親の仕事だ。」

真　「・・・。」

白瀬　「納得できないかい？」

真　「はい。」

白瀬、真、しばらく見つめあう。
白瀬、ため息をつき、少し笑う。

白瀬　「真ちゃんは生まれ変わりを信じる？」

真　「え？」

白　「どうだい？信じる？」

階段下に明かりが入り、聖の姿が浮かび上がる。

真　「・・・信じたいです。」

白瀬　「七生報国という言葉を知ってるかい。」

真　「いえ。」

白瀬　「七回生まれ変わっても国に尽くす。そういう意味だ。私はこの言葉こそ、愛国運動の神髄だと思っている。」

真　「七生報国・・・。」

白瀬　「この言葉を真ちゃんにあげよう。くれぐれも短慮に走らないでほしい。」

真　「・・・。」

白瀬　「納得しなくてもいい。とにかく私は真ちゃんに危ないことをしてほしくないんだ。それだけはわかるね。少しでもいい、わかってくれるなら、あのナイフ、持ってきて私に預けてはくれまいか。」

真　「・・・。」

白瀬　「頼むよ。この通りだ。」

真　「・・わかりました。」

真、出て行こうとする。
すれ違いに彌生、入ってくる。真、彌生に黙礼。出て行く。

彌生　「危ういですね。」
白瀬　「ああ。なあ、彌生ちゃん。私を愚かだと思うかい。」
彌生　「どうでしょうね。」
白瀬　「真ちゃんにしろ、この国にしろ、今が瀬戸際だ。私には、砕け散りそうなガラスの板の上を全力で飛び跳ねているように見える。強い力を掛ければ砕け散ってしまうだろ。だから、我慢に我慢を重ねて、守ってあげなければならないと思うんだ。」
彌生　「わかってますよ。だから、どんなに後ろ指さされたって一緒にいるじゃありませんか。」
白瀬　「そうか。そうだったな。」

短い沈黙。
真、ナイフを持って戻ってくるが彌生の言葉に足を止める。

彌生　「真ちゃん、おうちに帰しましょう。」
白瀬　「今わかってるって言ったばかりじゃないか。どうしてそんな。」
彌生　「わかってるからですよ。」
白瀬　「・・・。」
彌生　「あの子は私たちの手に負えません。あの子の純粋さはあなたを、愛心党を必ず傷つけます。」

真、ナイフを握り、二人に深くお辞儀をして、出て行く。

彌生　「わかってください。愛心党は私の家です。私はあなたとこの家を守る義務がある。真ちゃんは危険です。」
白瀬　「・・・いいのかい、彌生ちゃんだって、あんなに楽しそうに・・・」
彌生　「・・・。」
白瀬　「・・・わかった。」

白瀬、黙っている彌生を残し出て行く。
彌生、一つ深呼吸をする。

彌生　「あの子は家に帰す。これでいいんです。」

明かりが戻る。

立花、加藤。取調室。

彌生　「一本、いただけませんか？ちょうど、手持ちを切らしちまって。」

立花　「駄目だ。」

彌生　「何しみったれたこと言ってんですか。いいじゃないですか、一本くらい。」

立花　「駄目だ。体に障る。俺は女には、体、大事にしてほしいんだよ。」

彌生　「勝手なもんですね。自分じゃ散々吸うくせに。」

立花　「うるせえ。」

彌生、艶やかに笑う。

が、その笑いが中途半端に消える。

彌生　「所詮、誰かのためなんて、自分勝手な言い分かもしれませんね。」

立花　「・・・そうだな。」

彌生、軽く立花にお辞儀をして、出て行く。

【八】

加藤、真を連れてくる。

加藤　「座って。」

真　「ありがとうございます。あの、その手・・・。」

加藤　「何？」

真　「ちゃんとお医者さん行ってくださいね。黴菌入ると大変だから。」

加藤　「大丈夫。もう傷はふさがってるから。」
真　「駄目です！大事にしないと。お願いします。」
加藤　「わかった。」

沈黙。

加藤　「あの、何か持ってこようか？スモモは？」

真、首を振る。

加藤　「あー、じゃあ、お母さんの砂糖菓子だっけ？あれ持ってこようか？」
真　「あの・・・甘いもの、お嫌いじゃないですか？」

二人、顔を見合わせる。

加藤　「別に嫌いじゃないけど・・・。」
立花　「むしろ好物だ。」
真　「じゃあ、差し上げます。」
加藤　「え、いいの？」
真　「差し上げます。召し上がってください。」
立花　「甘いもの、好きだったんじゃないのか。」
真　「昔は。でも、兄が死んでからはあまり・・・。」
立花　「そうか。」
真　「母は、何度言っても覚えてくれなくて・・・。多分、母の中では私はまだ兄と一緒に遊んでいた頃の小さい私なんです。もう、随分前になるのに・・・。」
立花　「・・・始めるか。」
真　「はい。」

加藤、資料を開く。

加藤　「じゃあ、事件に至るまでの経緯を。」
真　「はい。」

加藤「あの頃、君は何をしていたの？」
真「愛心党を出て家にいました。たまに授業を受けたりもしましたが、あまり学校には行かず、家でラジオの外国語講座を聞いたりしていました。」
加藤「お母さんとお父さんは、何か言ってた？」
真「特に何も言いませんでしたが、母は、私が戻って嬉しそうでした。」
加藤「お父さんは？」
真「・・・父は、ああいう人ですから。」
立花「嬉しかったに決まってるじゃねえか。」
真「何ですか、急に？」
立花「いいか、父親なんてなぁ、そんなもんなんだよ。どんなに自分の娘が可愛くたって、照れくさくて、うまく伝えられねぇもんなんだ。」
真「そういうものなんですか。」
立花「そういうもんだ。」
加藤「立花さんとこも娘さんですもんね。」
立花「うるせえなぁ。俺は別に・・・。」
真「そういうものなんですね。」

真、少し笑う。

加藤「・・・どうして、そんな風に笑えるの？」
真「え？」
加藤「どうして、そんな風に笑う君があんな風に人を殺したんだよ！どうして？」
真「・・・。」

沈黙。

立花「どうして、赤巌さんだったんだ。」
真「・・・？」
立花「他にも標的がいたんだよな。それなのにどうして赤巌さんだったんだ。」

階段に明かりが入る。

聖　「新世界の王。」
真　「新世界の王だから。」
立花　「なに？」
真　「この国の赤化を止めるには、国民の信も厚い、共和党委員長赤巌委員長を倒すべきと考えました。」

沈黙。

立花　「やるからには命を奪おうと思ってた。そう言ってたもんなぁ。」
真　「はい。」

短い沈黙。

加藤　「供述の確認をさせてください。
朝起きて、午前八時ごろ家に配達された、読売新聞の今日の行事の欄で、午後二時からの、日比谷公会堂での三党首立会演説会を知った。間違いない？」
真　「間違いありません。」
加藤　「この会で決行しようと思った理由は？」
真　「この演説会は、一般の人も自由に入場できる、そう知ったので。」
加藤　「それから？」
真　「十時くらいに、学校へ行くふりをして家を出て、池袋の西武デパートでフルーツサンデーを食べて、屋上でしばらく時間を潰して、一旦自宅に戻りました。そこで、隠してあったジャックナイフを取り出して・・・。」

真、ジャックナイフを取り出す。

明かりが変わる。
舞台は群衆の歌声で満たされている。

群衆　「（♪『インターナショナル』を歌う）」

突き当りに滲むような光の十字架が見える。

両脇には柵のような壁。その影が映る舞台面は檻の中のように見える。
舞台壁沿いには木の丸椅子、影の中で数人がその前に立ち並んでいる。

真が一人、ゆっくりと階段を上っていく。

鐘の音が鳴り響く。

真　「一段目、思い切って踏み出す。
二段目、やっぱりやめようかなと迷う。
三段目、進まなければと自分を鼓舞する。
四段目、失敗するに決まってる、弱気になる。」

十字架の根元に澱んだ闇の中から、聖が立ち上がる。
聖が真に手を差し伸べる。

真　「五段目、手の中の刃を握りなおす。
六段目、その手が汗ですべるのを感じる。
そして、七段目！私はその人に体ごとぶつかっていった。」

真の手にした刃が聖の身体に吸い込まれる。
十字架の灯りが強烈に辺りを照らす。

真　「覚えているのは、ずり落ちた眼鏡の中から私を不思議そうにみつめる見開かれた
小さな目と、壇上にばらまかれた演説用の原稿用紙。
手の震えはいつの間にか止まっていた。」

真、聖に語りかける。
その二人の姿は抱き合っているかのようにも見える。

真　「なんでロンギヌスは、もう死んじゃってるイエス様を槍で刺してみたんだろ。」
聖　「それはきっと確かめたかったのさ。」
真　「確かめたかった？」

真、刃を引き抜き、二撃目を加えようと身構える。

聖　「誰が正しいのか、誰が本当の新世界の王なのか！」

真　「兄さん、これがロンギヌスの槍よ！」

その刃が再び聖を刺し貫く瞬間。

加藤　「やめろ！」

フラッシュの光。

入り乱れる怒号と、救急車やパトカーなどのサイレン。

流れるニュースの音声。

その中、立花だけが真を静かに見つめる。

立花　「お前が刺したのは、誰だ。」

真　「え？」

立花　「そこで、お前の刺したのは、誰だ。」

聖　「新世界の・・・。」

真　「共和党委員長・・・。」

立花　「そうじゃねぇ。お前がそこで刺したのは赤巌弥太郎。どうしようもなく無器用な赤巌弥太郎っていう男だ。無器用でも一生懸命、戦中戦後の動乱の時代、政治って世界に生きた一人の人間だ。」

真　「人間？私は・・・。」

聖　「彼らは自分が刺し通した者を見るであろう」

真　「彼らは自分が刺し通した者を見るであろう」

真、群衆や、兄の視線の中にさらされている自分に気づく。

立花　「お前は立派な殺人犯だ。」

真、呆然と立ちすくむ。

周りから、人々が立ち去っていく。

【八の結】

加藤　「結局教唆の線はないって、立花さん、そう仰るんですか。」
立花　「そうだ。」
加藤　「じゃあ、なんで、こんなことが起こったんです！十七歳の少女が、大の大人を公衆の面前で刺し殺したんですよ。しかも、ほぼ一撃で。信じられますか？」
立花　「俺ら現場にいたろ？」
加藤　「はい。」
立花　「それで、止められなかったんだよな。」
加藤　「そうです。だから、だからですよ！だから、なんでこんなことになったのか知りたいんです。そうでしょ。」
立花　「・・・。」
加藤　「戦争が始まったとき、うちのおふくろがよく言ってました。『正常なものも異常なものと一緒にしておくとやがて異常になる。』あの子、どう見ても正常じゃないですか、何かあったんですよ。異常な何かが。だから、こんな」
立花　「異常なことになった、か。」
加藤　「そうです。」

沈黙。

立花　「怖いんだな。」
加藤　「え？」
立花　「怖いんだ。お前は。」
加藤　「何言ってるんです？」
立花　「怖いんだよ、お前は。あの子があんまり普通だから。あのお母さんもあのお父さんも、みんな普通の人だから。だから怖いんだよな。」
加藤　「・・・。」

立花　「怖いよなぁ。『なんで』って理由がよく見えないのはよ。」
加藤　「・・・立花さん・・・。」
立花　「本当、普通の女の子だもんなぁ。」

沈黙。

立花　「怖いよなぁ。あんな女の子が人殺せちまって、それが普通のことだなんてな。」

沈黙。

立花　「『なんで』って、そういう理由もよくわからねぇままで、俺らにそれが裁けんのかね。」

沈黙。

【九の序】

進藤が紙袋を片手にうつむいている。
加藤、真を連れてくる。

真　「・・・進藤さん？」
進藤　「あ・・元気？」
真　「うん。」

沈黙。

進藤　「あのね、これ、良かったら食べて。スモモ。」
真　「ありがとう。」

沈黙

進藤「あのね、今日は一人で来たんだ。」

真「そう。」

沈黙。

加藤「そろそろ、行こうか。」

真「はい。進藤さん、ありがとう。」

加藤、真を連れて去ろうとする。

進藤「あのね。」

真「なに？」

進藤「あのね、私ね。」

真「なに？進藤さん。」

進藤「ごめん、嘘ついた。私、山之内さんのことあんまりよく知らない。」

真「そうだよね。知ってる。」

進藤「でもさ、でも、ひょっとして、もっと早く話してたら、私たち、きっと、仲良くなれたんじゃないかな。」

真「・・・うん。
私もそう思う。」

沈黙。

進藤「あのさ、いつかさ、」

真「え？」

進藤「いつか、うちに遊びにおいでよ。スモモ、皮剥いて食べよ。」

真「お塩つけて。」

進藤「そう。お塩つけて。」

真、進藤にゆっくりと丁寧にお辞儀。

真　「進藤さん。会いに来てくれてありがとう。」

加藤、真を連れて去る。

進藤、それをいつまでも見送っている。

【九】

喪服の女が椅子に腰掛けている。

きちんとまとめられているがやや白髪の混じる髪。

しかし、背筋はまっすぐと伸ばしている。

立花、入ってくる。

立花　「お待たせいたしまして。」

香子　「いえ。」

立花　「この度はお呼び立ていたしまして。」

香子　「こちらこそ、色々とご面倒おかけしました。」

立花　「落ち着かれましたか。」

香子　「いえ、まだいろいろと。煩わしいことばかりです。党の人事などもございますから。」

立花　「そうですか。」

香子　「あの、今日はどのような。」

立花　「ああ、御遺品をお返ししようと思いまして。」

加藤、入ってきて、机の上に紙袋を置き、香子に書類を差し出す。

加藤　「こことここにご署名をお願いします。」

香子、黙って、筆記具を受け取り、書類にサインをする。

ペンを置く。

加藤　「中を確認されますか？」
香子　「・・・ああ、そうでしたわね。」

香子、紙袋から遺品を取り出す。
眼鏡を手に取り、

香子　「・・・このメガネ、ここのところ老眼が進んで度が合わなくなってしまって。かけたり外したりが面倒だとか言って、眼鏡をずりおろして、上目遣いでこっちを見るんです。私も娘もそれがとても嫌いで。」
加藤　「そうですか。」
香子　「この原稿。あの朝、ぎりぎりまで見やすいようにみんなで清書したんです。党首討論で読み間違えたらいい笑いものだって、あの人、言うもんですからね。大勢で徹夜して、本当、大騒ぎでした。」
加藤　「・・・身につけられていた衣服は、血で汚れていたのでこちらで処分いたしました。」
香子　「そうですか。お手数をおかけしました。」

沈黙。

加藤　「こんなことになり、とても残念です。なぜこんなことになったのか、我々が全力で」
香子　「・・・そんなこと、知ってどうなるんですか？」
加藤　「え？」
香子　「なぜこんなことになったのか、それがわかったところで、あの人が帰ってくるわけじゃないでしょう。違いますか？」
加藤　「それは・・・。」
立花　「失礼しました。」

香子、紙袋を持って立ち上がる。

香子　「あの、一つだけ、主人を刺したあの子に伝えていただけますか？」
立花　「何なりと。」
香子　「反省も謝罪も、何もいりません。そんなことしてもらったところで、主人は帰っ

ては参りませんし、私たちも、・・・絶対に許すことはできませんから。」

立花　「わかりました。」

香子　「それでは。」

香子、お辞儀をして出て行く。

【十の序】

鐘の音。

階段に祈祷書を手にした真。

真　「憐れみ深い父なる神よ。私たちはしてはならないことをし、しなければならないことをせず、想いと、言葉と、行いによって、多くの罪を犯しています。どうか罪深い私たちをお赦しください。」

テーブルに明かりが移る。

立花、資料を読みながら、煙草を吸っている。

加藤、入ってくる。

加藤　「立花さん、いい加減にしてくださいよ。吸いすぎじゃないですか。奥さんに怒られますよ。」

立花　「あー、いいんだ。」

加藤　「いいって、なんすか。そろそろ予定日なんじゃないんですか。」

立花　「だから、いいんだ。」

加藤　「また忘れたなんて、無責任なこと」

立花　「駄目だった。」

加藤　「え？」

立花　「駄目だったそうだ。」

加藤　「それは、」

立花　「残念だったなんて言うなよ。まだ何て答えていいかわかんねぇんだ。」
加藤　「・・・。」
立花　「神の思し召しって奴なのかね、残酷なもんだよな。」
加藤　「立花さん」
立花　「だから、今日からしばらくは吸いすぎだとかいうんじゃねぇぞ。わかったな。」
加藤　「・・・はい。」

しばらく、ただ、立花が煙草を吸っている間。

加藤　「あの、立花さん。」
立花　「なんだ。」
加藤　「昨日の、赤巌さんの。」
立花　「ああ、香子夫人か。あの人がどうかしたか。」
加藤　「自分、正直、どう受け止めていいのかわからなくて・・・。」
立花　「ふーん。」
加藤　「事件の動機を調べ、容疑者を罰に処して、反省を促す。それが自分たちの仕事だと思ってました。そして、それが、被害者の救済につながっているんだと信じてもいました。でも、そうじゃなかった。」
立花　「・・・。」
加藤　「立花さん、自分たちは、何のためにここにいるんですか？」
立花　「さあな。俺には難しいことはわかんねぇよ。」
加藤　「そうですよね。」
立花　「そういや、山之内も言ってたな。裁くのは俺らの仕事じゃねえって。」
加藤　「・・・。」
立花　「加藤、起こっちまったことは起こっちまったことだ。それはどう足掻いたって、変えられねぇ。だけどな。これから起こること、変えることくらいは俺たちにもできるかもしれねぇぜ。」
加藤　「立花さん。」
立花　「少なくとも、俺は、そう思う。」

沈黙。

加藤　「山之内、呼んできます。」
立花　「頼む。」
加藤　「あ、立花さん、今度、差し入れ、持ってきてやってもいいですか？」
立花　「何を。」
加藤　「スモモ。甘そうなの、近所の八百屋で見つけたんで。」
立花　「あんまり突っ込むなよ。」
加藤　「わかってますって。」

加藤、ちょっと照れくさそうに走り去る。

立花　「辛くなるだけだぞ。」

加藤、走って、帰ってくる。

加藤　「立花さん！大変です。山之内が！」

暗転。

【十】

テーブルの上に横たえられた真。手を胸で組んでいる。
そのそばの椅子に、父、母。
立花、加藤が立っている。

加藤　「シーツを二つに割いて、電灯の金具に通したようです。」
父　「そうですか。」
加藤　「前の見回りのときには何でもなかったらしいのですが、呼びに行ったときにはもう・・・。下ろした時には体温があって、まだ十分回復の見込みはあると思ったのですが、残念です。」

立花　「部屋を、ご覧になりますか？」

父、母の方を見る。

母、無言で首を横に振る。

父　「それでは。」

立花　「どうぞ。」

父、立花、去る。

母、真の髪を撫でるようにして、

母　「この子の髪。小さい頃はよく私が結ってあげてたんです。すぐ動くから、うまくできなくて。いつのまにか、自分できちんと編めるようになって。」

加藤　「そうですか。」

母　「昔は聖と二人で、ずっと私にひっついてばかりで。甘えん坊でしたけど、手のかからない子だったんですよ。」

加藤　「そうですか。」

母　「どうして、どうして、こんなことに・・・・。」

加藤　「・・・。」

母の肩をさすってあげることしかできない。

父、立花、帰ってくる。

父　「見てきたよ。部屋。本当に、ああいう部屋っていうのは何もないんだな。」

沈黙。

父　「壁に、字が書いてあった。真の遺書だそうだ。歯磨き粉で書いてあった。七生報国って。お前、わかるか、この言葉。俺は、なんだかよくわからないんだ。」

立花　「七回生まれ変わっても国に尽くすと、そういう意味だそうです。」

父　「そうですか。」

沈黙。

父　「やっぱりわからないなぁ。」

立花　「え？」

父　「自分には、この言葉を残した真の気持ちが心底わからないんです。」

立花　「・・・。」

父　「情けないですよね、父親、なのにね。」

立花　「・・・お察しします。」

父　「でも、変なとこ似ちゃうもんだなぁ。」

立花　「え？」

父　「見ましたか。あの字、へたくそで・・・俺の字にそっくりだ。」

父、真の白い歯磨き粉のついた手を握りしめる。

鐘の音が鳴り響く。

ゆっくりと暗転。

【結】

ラテン語の祈りの声が舞台を満たしている。

舞台上には大きなテーブル。古ぼけた四脚の木の椅子。

その前に立花が一人、立ち尽くしている。手には古ぼけた祈祷書。

舞台奥には石造りの階段。突き当りに滲むような光の十字架が見える。

両脇には柵のような壁。その影が映る舞台面は檻の中のように見える。

舞台壁沿いには木の丸椅子。しかし、その前には誰もいない。

ここは、法廷でもあり、牢屋でもあり、処刑場でもある。そして、日常のどこかの場所でもあるのかもしれない。

聖が、ゆっくりと階段を上っていく。

鐘の音が鳴り響く。立花、祈祷書をゆっくりと開く。

立花「さてユダヤ人たちは、その日が準備の日であったので、安息日に死体を十字架の上に残しておくまいと、ピラトに願って、足を折った上で、死体を取りおろすことにした。」

聖はただ上り続ける。

立花「そこで兵卒らがきて、イエスと一緒に十字架につけられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。」

十字架の根元に澱んだ闇の中から、真が立ち上がる。

真、聖に手を差し伸べる。

聖、少し微笑んだように見える。

立花「しかし、彼らがイエスのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。」

聖、隠し持っていた刃を握り真に近づく。

真、聖を抱きとめるようにゆっくりと手を広げる。

立花「しかし、ひとりの兵卒が槍でその脇を突き刺すと、すぐ血と水とが流れ出た。」

聖の刃が真を刺し貫くその瞬間、十字架の光が強烈に辺りを照らす。

立花「それを見た者があかしをした。そして、そのあかしは真実である。その人は、自分が真実を語っていることを知っている。それは、あなたがたも信ずるようになるためである。」

暗転。

真闇の中、真の声が響く。

真　「彼らは自分が刺し通した者を見るであろう」

終